都名所圖會

花書龍
再刻

和書門
類 二八九九八
號 一九
函 一一
架 六
冊

内閣文庫
和
書
類 二八九九八
號 三
冊 一二
架 函 一四

内閣文庫
番號 和 28998
冊數 6（ 3 ）
函號 172 175

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

都名所圖會巻之三目錄

左靑龍

稲荷土師圖　稲荷社　三の峰　田中社

東福寺　通天橋 紅葉名所　萬壽寺　泉涌寺 泉涌水

新熊野観音　同権現　柿園 貞徳翁古跡　妙安寺

三十三間堂 夜泣泉　矢数之圖　後白川院旧跡　寳生院

修成院　養源院　智積院　新日吉

大佛殿　耳塚　大佛餅屋場　継信忠信塔

洛東陶工圖　小松谷正林寺　豊國山　阿弥陀峯

清閑寺　歌中山　音羽山清水寺　音羽瀧

地主権現 桜名所　子安観音　西大谷　鳥邉山

靈山正法寺　三年坂　高臺寺 萩名所　菊谷

八坂法観寺　庚申堂　伽羅観音　七観音

内 一〇八二二號
故縣室藏

安井観勝寺
下河原
花見圖
東大谷
吉水
[illegible]生石
佛光寺廟所
小松谷旧地
蹴上水
澁谷
天智天皇山陵
本願寺旧地
牛尾山

金毘羅権現
蛙ヶ池
双林寺
長樂寺
知恩教院
白川橋
植髪堂
神明社
日岡
四宮川原
苔集滅道
蓮如上人塚
南禅寺 駒ヶ瀧

牛王地社
祇園社
西行庵
眞葛原
一心院
御猿堂
明智首塚
東岩倉
姥ヶ懐
弦羽社
小町寺
西本願寺御坊
永観堂

菊水
二軒茶屋
西行櫻
圓山安養寺
崇泰院
粟田天王社
長田首塚
将軍塚
御廟野
花山
山科
東本願寺御坊
悲田梅

来迎松
住蓮山安楽寺
黒谷金戒光明寺
吉田社 明星水
大文字送火
白川瀧
八大龍王
高野川
大原里
音無川
寂光院
比叡山
元黒谷

鶯の池
鹿ヶ谷万無寺
鎧掛松
百万遍知恩寺
下菜寺
一乗寺村 下り松
赤山社
八瀬里
勝林院
呂律川
汀櫻
日吉山王
横川

若王寺
淡合谷
紫雲石
銀閣寺
将軍地蔵
北山御坊
玉山社
脊競石
来迎院
後鳥羽院塔
朧清水
無動寺
飯室

光雲寺
梅門瀧
真如堂 紅葉名所
月待山
白川石伐
詩仙堂
御蔭社
竈風呂圖
融通寺
古知谷阿弥陀寺
江文社
近江八勝遠景圖

圖書局文庫
内 一〇八二二號

三之峰稲荷社

後拾遺
いなり山三の玉かきうちたゝき我祢きことを神もこたへよ
恵慶法師

三の峯稲荷大明神のやしろハ大和大路伏見街道の東にあり 往昔人皇四十三代
元明帝の御宇和銅四年二月十一日午の日此山に出現したまふ 本社ハ
宇賀御魂神 東二素盞烏尊 西三大市姫 已上 田中社 四大神 世に神祇を依
せて五座と称す 弘長二年に告ありて文永年中に併せまつる 神祇拾遺
又田中社の客人神大歳神ハ鶴と化して稲の實を含んで来現したまふ
此ゆへに一切の鳥を禁るとぞ 紀氏に延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣
時平三箇社を修造すと 又永享十年に社ハ三の峯より今の地に移すと
ぞ 上の社ハ宇賀御魂倉稲魂伊弉諾伊弉冊尊を崇奉る 二月の初午祭ハ
和銅年中二月初の午の日出現より恒例の祭事とする 倉稲の縁により
て土器黍粟等を土産とするなり 古ハ神木の杉の枝をとりて
帰りて家に収しとぞ

初午をよめる

堀川院

稲荷山しるしの杉を尋ねきてあまねく人のかざすけふかな　師仲朝臣

三の峯の御注連張ハ毎歳正月五日なり 古山の峯後ハ跡あり今ハ谷間て小谷流を林藪を分て坂川といふ

拾遺

跡のなくりてすまハ稲荷山七日のかりしるしとぞみん　讃岐

稲荷行幸の時

夫木

いなり山杉されは社をまもるそされたてゝわと祈る孫すなりけり　周防内侍

例祭ハ四月上の卯の日也 神輿五基九条の御旅所より東寺南の大門
を擁入て金堂のまへに神輿を据え産子ハ神供と頭に戴て運び持ちく
献じ 僧侶ハかりはく出て法施し 東寺の一山の
衆僧ハ東西に列し 弦召ハ东のかたに登りて甚厳重なる粧ひ也
なりぬるなし 是を東寺の神供といふ 近年安永三甲午年より祭
礼の式再興ありて幣殿の首ハ勅裁綸旨 弓 楯の神具かずかず列ね
神輿の後ハ社司のめんく騎するまで供奉し 唐鞍の神馬三疋 其
外大幣 神馬 菅蓋 錦蓋等そのおゝく法しあり 巍々渝々として
壮麗なる祭式なり

東福寺
十三重塔
佛殿
山門

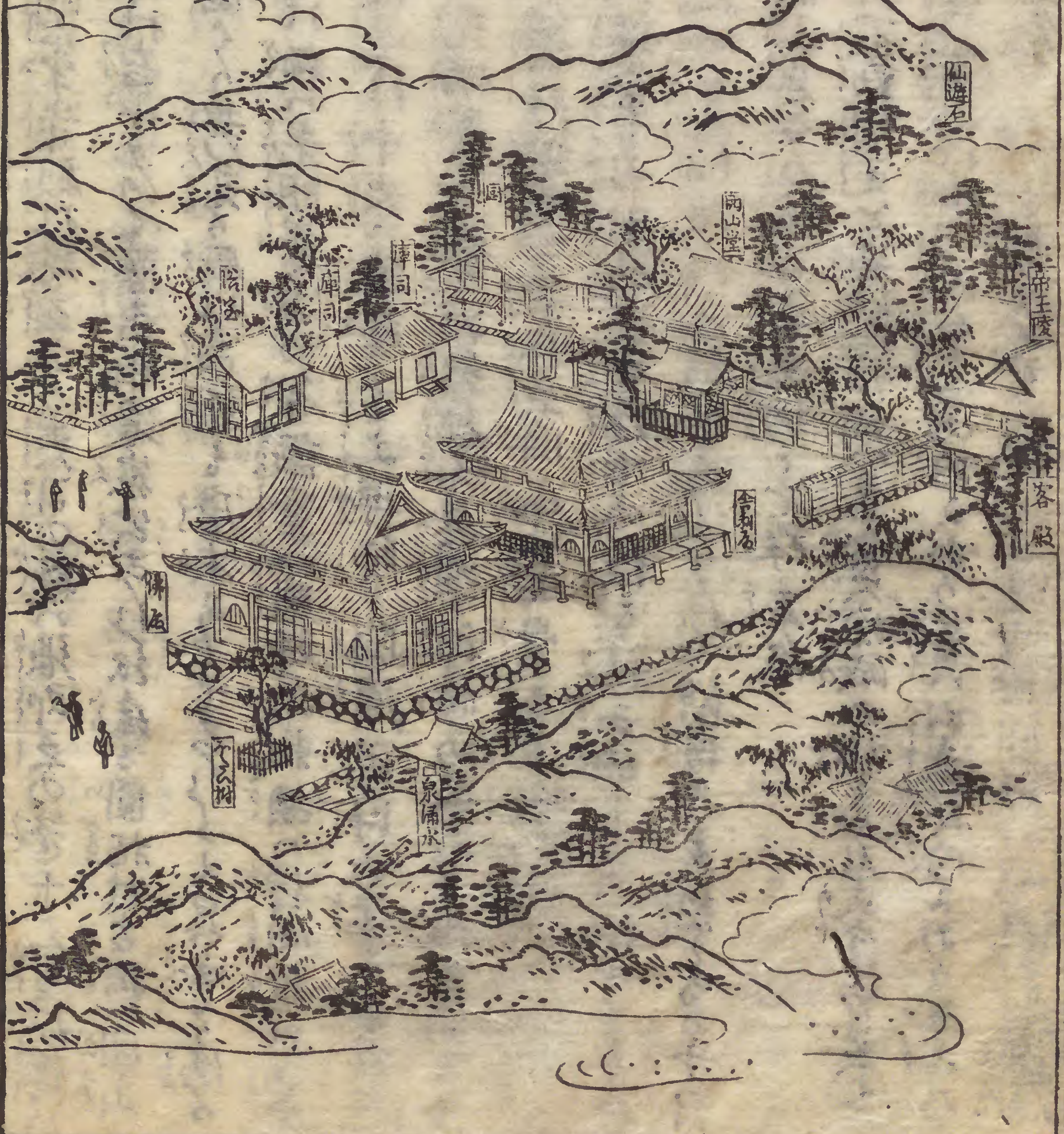
傳衣閣
方丈
通天橋
法堂

恵日山東福寺ハ五山の第四なり大和大路一の橋の南にあり当寺の開山聖一国師諱ハ辨円駿州藁科の人なり十歳にして天台宗を学び十五歳にして之大綱を終て十八歳にして園城寺にて髪を剃東大寺の戒壇にのぼり受戒せりあるとき三井を出て野州長楽寺にいたり栄朝に随ひて別伝の道を参するの程その奥旨を極んと欲し人皇八十六代四条院の御宇嘉禎元年に入唐し宋の径山寺無準を師とせり斯て六年を経て仁治二年の秋帰朝せり寛元元年是より九条太相国光明峯寺殿下より（関白道家公）東福寺を賜りて住職せり弘安三年十月十六日七十九歳にて遷化す偈曰利生方便七十九年欲知端的仏祖不伝。遷化の日当山の竹木色を変じ双樹のごとく枯る九十四代花園院の御宇正和のころ謚を聖一国師と勅号を賜る元国師の號ハ是よりぞはじまりき（当寺の號ハ南都東大興福の両字を合せて用ゆるとあり）山門には妙雲閣といふ横額あり足利将軍義持公の筆なり

佛殿の本尊ハ釋迦佛法堂ハ潮音堂と號す額ハ無準の筆なり
天井の幡龍ハ初代兆殿司の筆なり此人大道和尚の弟子にして
諱ハ明兆字ハ吉山なり凡来る繪に書始あらす記に定めて龍
を画ず天ふとび不動をかけてハ火炎をりえぐるとかや或ひハ龍を画
れいまだ生身の形を見ねど願くハ佛神生身の形を見せしめ給へと
持念せるに思圓池の水漲上り生身の大龍目前に出現せり其形を
うつして天井に画兆殿司滅後に画龍とび出て登天せしと云傳ふ
其後狩野光頼是を画今の幡龍これなり當寺の涅槃像ハ應永
十五年六月殿司六十七歳にして画るよし明兆にあり本朝無双の
像なれバ世に名高し其外當寺に図畫多し一生画る繪其ハ神感
を得て稲荷山のかより出る今繪具谷といふ
方丈の額ハ張即之の筆選佛場の額ハ徑山無準の筆又本尊ハ
文殊菩薩聖観音を安置す當寺の鎮守ハ成就宮といふ 石清水加茂 春日稲荷

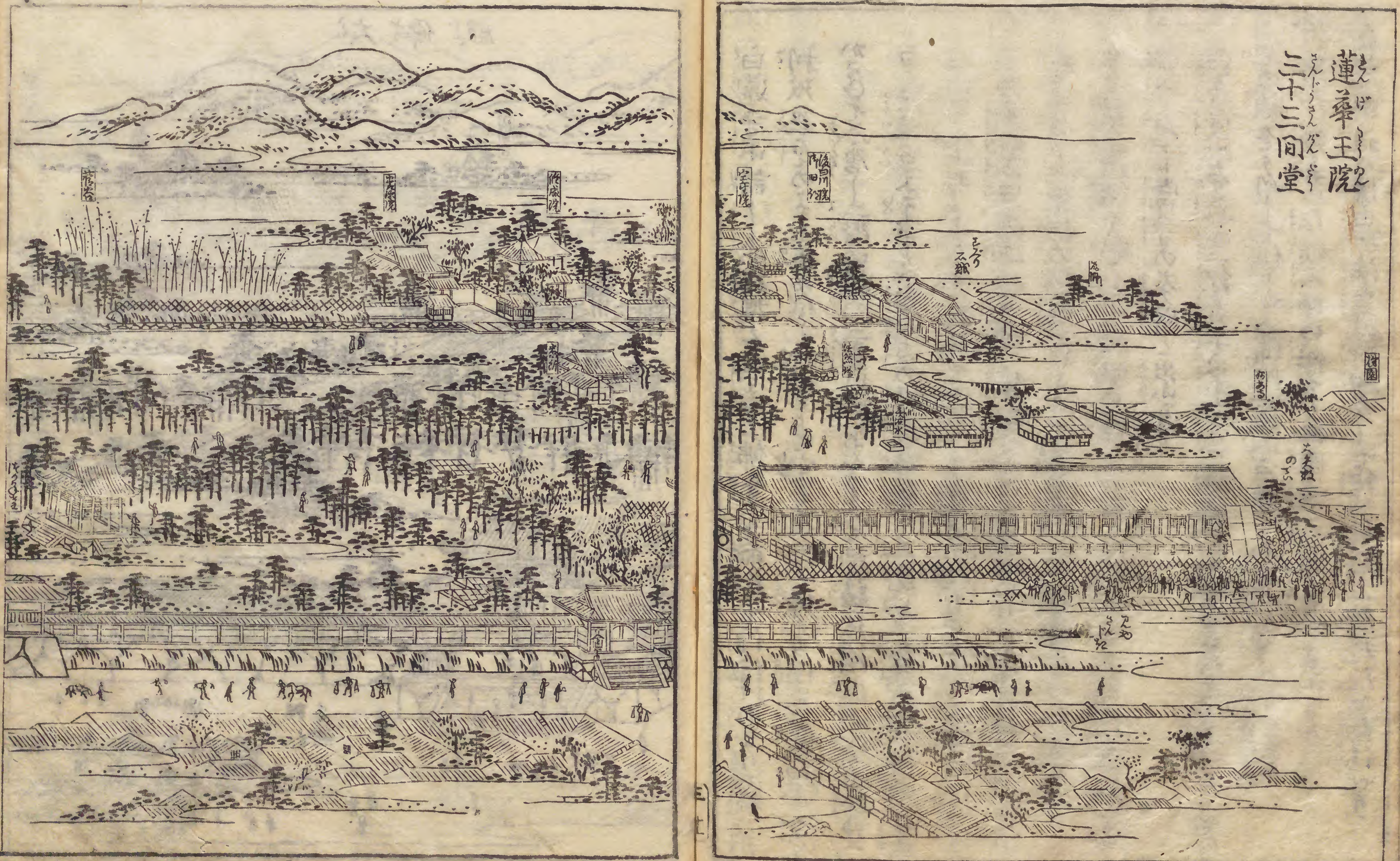
五社を勧請す 光明峯寺殿の建立なり東司の額ハ張即之の筆十三重の石塔ハ
比良明神の告によつて藤原相道家公これを建る圓栢の古樹ハ開山
國師宋國より携来る厨の高梁も唐木にしてこれも異国より渡る
常楽庵の額ハ光明峯寺の筆諡聖一國師の勅額ハ持明院の宸
筆なり祖堂の中央ハ達磨 百丈禅師 臨濟禅師の像を安置し
後壇にハ光明峯寺殿下の影 徑山無準禅師の像あり傳衣閣にハ
毘沙門天薬師観音を安し是開山の昭堂なり 當寺建立の初より回禄の災かつてなし
通天橋の額ハ普明國師の筆橋下の溪を洗玉澗といふ此所より
楓多し秋のもみぢ紅錦の色をあらはしけれバ洛陽乃貴賤とある十月
十六日ハ開山忌なり倍に参詣閙しぞ群集す
五大堂にハ不動明王を安す正月廿八日火災除滅の札を出す文字清見之
萬壽寺ハ當山の山門三聖寺の内にあり昔ハ六条坊門にあり五山乃
列第五なり
三聖寺 愛染堂 大和大路一の橋の南にあり [illegible]

泉涌寺（せんゆうじ）

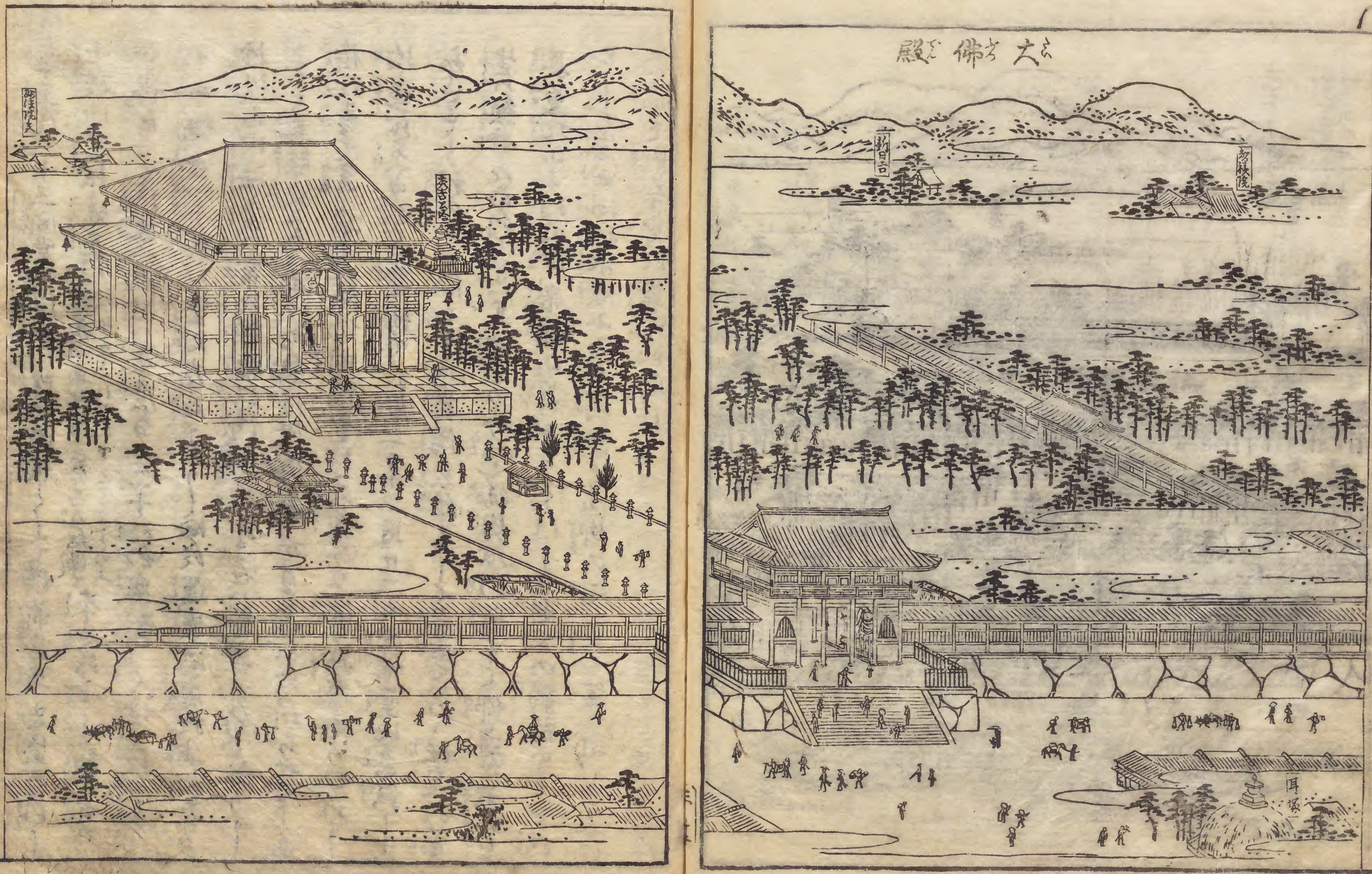


東山泉涌寺は大和大路一の橋の東にあり當寺の初は弘法大師の開
基なり其後文徳帝の御宇斉衡二年に左大臣緒嗣公再建あり
て天台宗となし仙遊寺と號す此山は仙人のあそびしゆへなり中興の
開山は俊芿法師號は我禅それより改めて天台真言禅律の四宗兼
学を當山の麓に霊泉涌出しければ號を泉涌寺と改む
俊芿法師は肥後國飽田郡の人なり仁安元年八月誕生し四歳にて
天台の碩学真俊が弟子となり十八歳にて落髪し十九歳にして
太宰府の観音寺にて具足戒をうけ二十三歳にて律宗を修め
それより宋國にわたり四十六歳にして嘉定四年二月廿八日帰朝せり
建保六年に和州の刺史中原信房が宗教に帰依して我所地泉涌寺
を寄附せりまた當寺に住職して後堀河院の御宇嘉禄三年
閏三月八日六十二歳にして遷化せり
天子の官寺となりて今は八十六代四條院を權輿とせり此帝降誕の時

我禅々々と宣り後芿我禅和尚再生して天子の位に即り四條院と
出誕しゆふよし人の夢に入りるとぞ是より以来代々の帝當山に
葬り奉る陵ハ前帝神主殿の前にあり
佛殿の本尊ハ弥勒釋迦阿弥陀の三尊を安置し東山といふ額ハ
張即之の筆なり
舎利殿の本尊ハ佛牙の舎利なり二重の金塔に安置し抑此佛
牙ハ由来を尋ぬるに佛涅槃に入給ふ時羅刹足疾鬼ひそかに窃みて
佛牙を掠奪とりし故韋駄天降伏をくわへ取かへし昼夜に敬く
身を離さず給ひしが終して佛滅後一千六百余年を経て大唐の白蓮寺道宣
律師戒香薫修の感徳冥感にも通じけるにや韋駄天此を授けし
三版八戒をうけぬて其頼基に此佛牙を授けなりまよう人君に伝り
白蓮寺に納め金閣の宝函に秘しおけるを日本に渡さるるハ当山中
興の開基俊芿法師ハ宋国に渡りし蒙鈞を慕ひて
白蓮寺に詣し赤栴檀を供ぜて佛牙を恭礼し仰信ハあまりに竊に舎
利を請ひのよし述るれども叶ハずして空く本朝に帰しが猶志をやむるまじく
かさねて入唐し二十年の楼門三重の塔婆をうまへて舳艫を滄溟にうかへるゆへ
多くは将軍に至りしが白蓮寺の経造成就し大に甚深の志を感じ其
徳の凡人にあらざる事を知りて酬答として来賓に任ずべきよし勅命一同なり
しかば是故万里渡海の本懐ハ偏に佛牙の求請にあり二度朝乃素願
遂しまぐら舎利の利益をおもふよし具に述るれバ忽佛牙の付属をゆるし
又り欽喜の涙をおさへて帰帆の纜をとれおもむへく彼御舎利を本
朝にうつし当寺の本師と崇奉る
観音堂の本尊聖観音ハ玄宗皇帝楊貴妃に別れまゐらせて追善乃ために
妃の貌をうつして作りる補陀落山の額も此帝の筆なり（洛陽観音堂の其二）
新熊野観音ハ弘法大師の作なり西国順礼観音の其一なり
新熊野社ハ後白川法皇の御願にして紀州熊野三所権現を勧請せり


蓮華王院（れんげわうゐん）
三十三間堂（さんじうさんげんどう）

大仏殿



蓮華王院三十三間堂は後白河院の御願として備前守平忠盛奉行し
千體御堂を建立あり（堂東向南北六十六間二面に備て柱の数立られは三十三間あるゆへ）本尊は千手觀音の
坐像にして御丈八尺他は康慶より二十八部衆およく壇上に安置す
千手觀音一千體は堂内左右にましまし運慶湛慶の作なり
抑後白河法皇は常に頭痛の御惱をましませハ醫療さまぐあり
しかも其驗ありましませば熊野に御幸ありて此事を祈らせ給ふに
權現告て宣ふやう洛陽因幡堂に天竺より渡りし醫者あり此人に
治療を受べしと宣ふに依て永暦二年二月廿二日因幡堂に参籠して
祈られけるに其満ずる夜貴僧忽然として又告ていふ法皇の前
生は熊野にありて蓮華坊といふ人也海内を行脚して佛道を修行せ
其薫功によりて今帝位に昇りたまへども前生の髑髏いまだ朽
ずして岩田河の水底にあり其頭より柳の樹貫て生す風の吹毎に
動揺を則今身に響て此惱をなせり急ぎかの髑髏をとりあげ苦惱を

免るべしと告給ふにて法皇此頃よ西に出て夢覚ぬ則使を以て
所をたづね給ふに河底より髑髏を求め出し給ひ觀音の頭中に納め
三十三間堂を建立して蓮華王院と号す其柳の樹を堂の梁と
なさしむ（已上平等寺縁起の意）又或説には鳥羽上皇得長壽院を御造営ありて一千
体の觀音を安置し給ふ後改て蓮華王院と號すともいへり（築地の北の方にハ熊谷の御陵あり門外の下にあれハ）
（佐々木志津摩が筆なり）堂前より夜泉あり傍に池ありて春の末より初夏の頃迄
燕子花咲乱れて濃むらさきの色池の面に麗しく京師の騒客遊びの
茶店に宴を催して終日まで此花を賞す當寺の住職なり
大矢数の濫觴は新熊野鈴木の別當梅坊和尚と云人八坂の青塚の的
場へ通ふ人帰さるに當る此後堂に休み射初しより連年誹候の家に出て
射術の達者此所にて當所より通矢の檢證出て其一を崇む其後金銀の魔
を渡る尾張の星野勘左衛門八千本を通し貞享三年四月廿七日紀州和佐
大八郎總矢一万三千五十三通矢八千百三十三本よしてーを得たり

新日吉社ハ後白川院の御勧請なり舊地ハ是より南にして日吉坂と
今はとなふる所なり應仁の乱に破壊を其後妙法院堯然法親王再
建しまふ例祭ハ毎年四月九日 近年ハ月九日後 再ハ月十四日となる 行ふ妙法院宮御領の神なり
智積院ハ宗旨眞言新義なり本尊ハ不動明王興教大師の能く開山たり
正憲法印當寺ハ豊臣秀吉公子棄君早世れるが爲に祥雲寺と草創ある
紀州根来寺滅て後其鏝派の断絶ふたり新義の徒是を歎く
御當家に禁所を宗に依て祥雲寺を給て智積院と號し新義派の学室とす始
養源院ハ宗旨天台なり本尊ハ阿弥陀佛恵心れ作當院ハ淺井備前守
長政の草創にして開山ハ盛伯法印なり
作成院の本尊ハ元三大師傳に歓喜天を安置
寶生院ハ本尊毘沙門天なり後白川法皇の宸影を安置
妙安寺ハ蓮華王院南門の外池田町にあり虚無僧の本寺とし
西國三十三所ふれの属院達磨普化より祖師とす

栂園ハ妙安寺の南にあり松永貞徳住すひし遺跡なり
貞徳家集曰
大和大路のほとり大佛殿の南に地を申請て栂園と名づけ花を見
実れる木を植て翁子昂が去し法華経を梓にちりばめ千部すりて
八千藏よりそこへ報恩経を造り納めければ内陣れ戸を開て聖徳太子
達磨大師の御影ひとまき九間に定家紫式部の影像をうつし妙法院
二品法親王 堯然 證をさせ給ひ紙四まいれ戸にそなへ吟花廊とえひ
芦の丸屋をとりまへ中の八日よりまで日に東光院殿玖山公泰勝院
玄旨法師れ法楽の會をさんだりん 下略
貞徳翁童名勝熊といひしとれ九條殿下へまゐりて源氏物語を読せられ
孟津の御抄の奥書を御ゆるし御所にて全部功終るれば御扇を賜りしされ
御筆の紙の作れる源氏のおくくせよとみえり三箇の大事止観の御説まで
相傳して後妙覚と老蓑の連歌数々に殿下より御勘気して御發句に
花に従道を今さんゆく家の風 九條殿下
妻ハ小谷よりひろれぬる袖 勝熊
鶯をさへすむ野のきこえ鳴すぞ 玄旨法印

大佛殿方廣寺ハ後陽成院御宇天正十六年豊臣秀吉公の御建立なり
本尊ハ盧舎那佛の坐像御丈六丈三尺佛殿ハ西向にして東西廿
七間南北ハ四十五間あり楼門にハ金剛力士の大像なり長ハ一丈四尺
あり門の内にハ高麗犬あり金色にして長七尺 あれハ豊国のやしろ
廻廊ハ南北百廿間東西百間あり堂前に建る石燈籠にハ列国にありしといふ
諸侯の名を刻む佛殿の基石又正面石垣の大石にハ国々出所の名或ハ
諸侯の姓所等あり廻廊の外にハ採石築を交へて掛くり
慶長七年十二月四日にハ佛殿回禄をは十五年右大臣秀頼公
ふたゝび再営ある寛文二年本尊銅像を改て木像としぬ
右図秀吉公の石塔ハ佛殿の南にあり豊国崩まそ後これを営し
とりハ塔前の石燈籠にハ慶長十年九月とあり
撞鐘堂ハ南廻廊の外にあり四間四方にして柱の数ハ十二本なり鐘
の高さ一丈四尺指わたし九尺二寸厚さ一寸五分

継信忠信塔

佐藤氏の兄弟ハ忠肝
義膽の人にして漢乃
紀信宋の天祥にも
抑しからざれ英雄也
美名後葉にかゞやきて
武士ならぬ人も慕ひ
貴むなるべし

此石塔婆昔ハ十三重なりしを
より星霜かさなりて
次第に崩れ落今ハ
土産の所に小園あり

洛東大佛餅の濫觴ハ則
方廣寺大佛殿建立の時
より公諸家の賞翫なり
其味美ふして前ニ湯に
殊に芳して陸放翁が炊餅
東坡が湯餅にもおとらざる
名品之唐破風作の額標版ハ
正水翁の筆ふして代々これを
して遠近に其名高し

大佛餅を瀧本坊へ
送るとて　安楽庵　侍策

白妙の
雪のむすびを
もちなから
かちんといふ
名のふるさよ

返し　瀧本坊　捏々翁

白妙の雪の
それも
あれからん
ともちかねて
きりひつくれ

耳塚は二王門の前にあり文禄元年朝鮮征伐の時小西摂津守加藤肥後守
を大将として数万の軍兵を討ちし首を日本へつとさん事難ければ
斬劓して送りし所に埋耳塚といふ
平相国清盛公六波羅の館は今の大仏殿の地なり中央にして北は五条
南は七条を限り大和大路は門前にして次に平正盛忠盛二代の地なり
清盛公に至っては境地広大にして殿舎には珠玉を鏤め楼閣丹青
香木を聚め東の方に大なる池あり傍に泉殿を造り其後池殿と
いふ凡亭宅の数百七拾余宇に及べて内府重盛公の居宅小松
殿まで二十余町の間殿宇建續たり其外家臣眷属の宿所五千二百余
宇ありしぞ平家滅亡の後も此所にありて北条泰時同時房等ここに来て
政道を行ふ正慶二年五月千種中納言忠顕赤松良忠大軍を以て
六波羅を攻ければ北条時益仲時後伏見上皇新帝を供奉して
関東へ逃趨る此時六波羅の館断絶す

小松谷 正林寺

小松谷正林寺ハ大佛殿の東にあり宗旨ハ浄土開基ハ恵空上人なり
本堂ハ殿舎造りにして九條殿より御寄附と称ス壇上にハ円光大師
の像を安置し南の方に阿弥陀堂あり楼門の額ハ九條関白尚實公の
御筆也明和年中にいたる所也此地ハもと月輪禅定兼實公の御所也
小松殿といふ法然上人此殿の御堂に於て傳しなりと黒谷傳記にあり
千年ふる小松のもとをすみかにて無量寿仏の迎へをぞまつ　源空上人
此所より西へ人家のかれ方に谷あり是を小松谷といふ小松内大臣重盛公
の山荘にして燈籠堂の地なり　委ハ盛衰記にあり
三嶋明神のやしろハ馬町北側にあり當所の氏神にして産子ハ一代
鐘を禁ずといふなり
継信忠信の石塔跡ハ馬町北側民家のうしろにあり石の大塔二基銘に
曰永仁三年二月二十日願主法西とあり一基ハ銘なし
阿弥陀が峯ハ豊国の後ろにあり慶長三年豊臣秀吉公を此峯に葬奉る

清閑寺

清閑寺ハ小松谷の艮にして佐伯公行これを建立す本尊ハ千手観音の立像菅神の御作なり

高倉院の陵當寺にあり

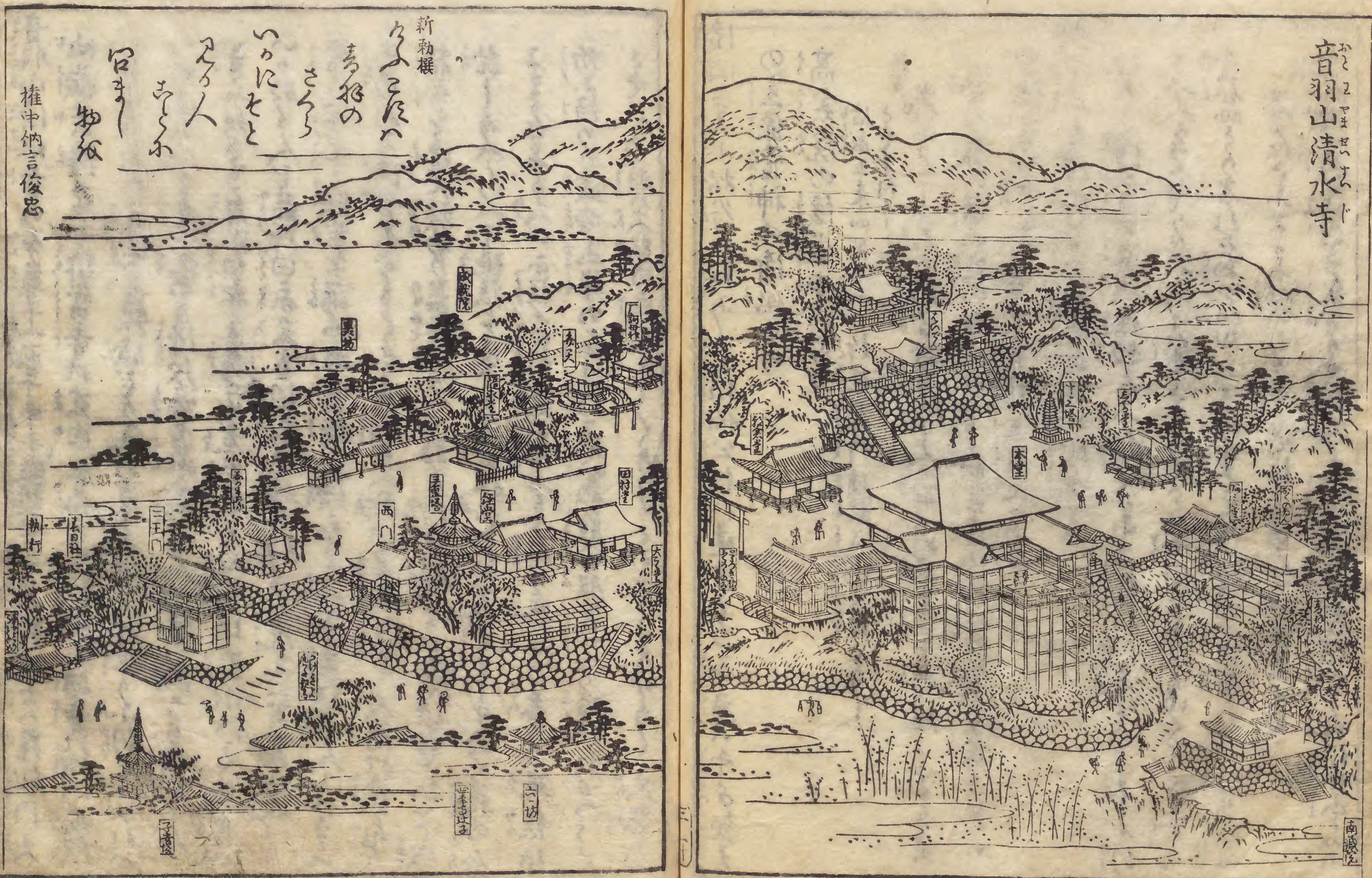
治承五年四月十四日新院崩御清閑寺にて烟とす
とそきこえける

新古 常に見し君か御幸をけふとへハかへらぬ旅と聞そ悲しき　法印澄憲

小督か墓ハ陵の左のかたにあり高倉院の御寵愛を蒙る桜町中納言の女なり　委ハ平家物語盛衰記にあり

歌中山ハ清閑寺の北音羽山の間をいふ

寺説 むかし清閑寺の真燕僧都といふ人信仰ある名僧なれ門外まて出てすゝみゐしに
うる人をおもふかのわかき女きたりてあはれなる人ありてゆくさまにそ忽ち
愛念おこりあれをおもひわくるに後すて清水の方へ何ともなく〳〵おはれハ女
かへりさまにまよひ心のかはりて清もののといひてきえる今き
とらひ捨て野に谷にまよひ食はる女ハ化人なるものや其身を涜ともおもひて中山といふ


音羽山清水寺
おとはやませいすいじ
新勅撰
権中納言俊忠
本堂

音羽山清水寺の本尊十一面千手千眼観世音菩薩脇士ハ毘沙門天
地蔵菩薩なり抑当寺の来由を尋ぬるに大和国小島寺の沙門延鎮
宝亀九年の夏異夢の感ずる事ありて木津川の辺りにいたりて見れバ
一つの流に金色の光あり源を尋ねて直に登るに一流の瀧ありて傍をみれバ
茅ぶきなる庵に白衣を着せる老翁あり延鎮此庵に入りて御身ハ
いかなる人ぞ翁の曰く我名を行叡といふ此地に住する事既に二百歳に及べり
常に千手真言を誦し我貴僧を待こと久し東にゆかんと思ふ
志あれど御身きたらんことを待ち我此地に年来住みて大悲の像を作り
精舎を建ん願ありしが若遅くなりぬれバ御身我にかはりて此願ひを成
就したまへといひて延鎮に是を授け告ぬれど詳なることをしらず翁の心
にまかせけるに大いに悦びて翁ハ東に向ひて庵を出て去りぬ延鎮此
所に住めり或時山科の東の麓にてかの翁の履を拾ひ延鎮おもふやう
さてハかの翁ハ大悲の応現ましましけるよとありがたくつゝしんで大悲の

尊像を安置せんと祈りみるがちからたらずして年月を送りしに
延暦十七年に将軍坂上田村丸産婦のために鹿を猟して音羽山
にわけ入かの茅庵に至り延鎮田村丸に逢て翁の志をかたりしに殺
生の田村丸渇仰のおもひを起し屡延鎮の相好を拝みしに神仙のごとし
是即大士の化現ならんと信心いやまし家に帰て妻女にかたりけり
妻の曰く我病を治せんとて多くの殺生をなす此罪いかでかのがれん
悔し其懺悔にせめて大悲の尊像を安置し奉らバいかばかりの利
益あるべしと夫婦心をあはせん館を施して延鎮に寄附せんとす彼
約をなし敷地を構し霊木をもて観音の尊像を作らんとすれバ延鎮
其夜夢中に十一人の僧来りて大悲の像を作る長八尺十一面四十臂にて千手
観音を造り終って十一人の工僧行方をしらず夜更て尊
容現しのびて目前にあり当寺本尊是なり夫より仏教を建んとて又此地
嶮岨にして天地もうごきけるばかりに心憂しに其夜忽ちに麓まで

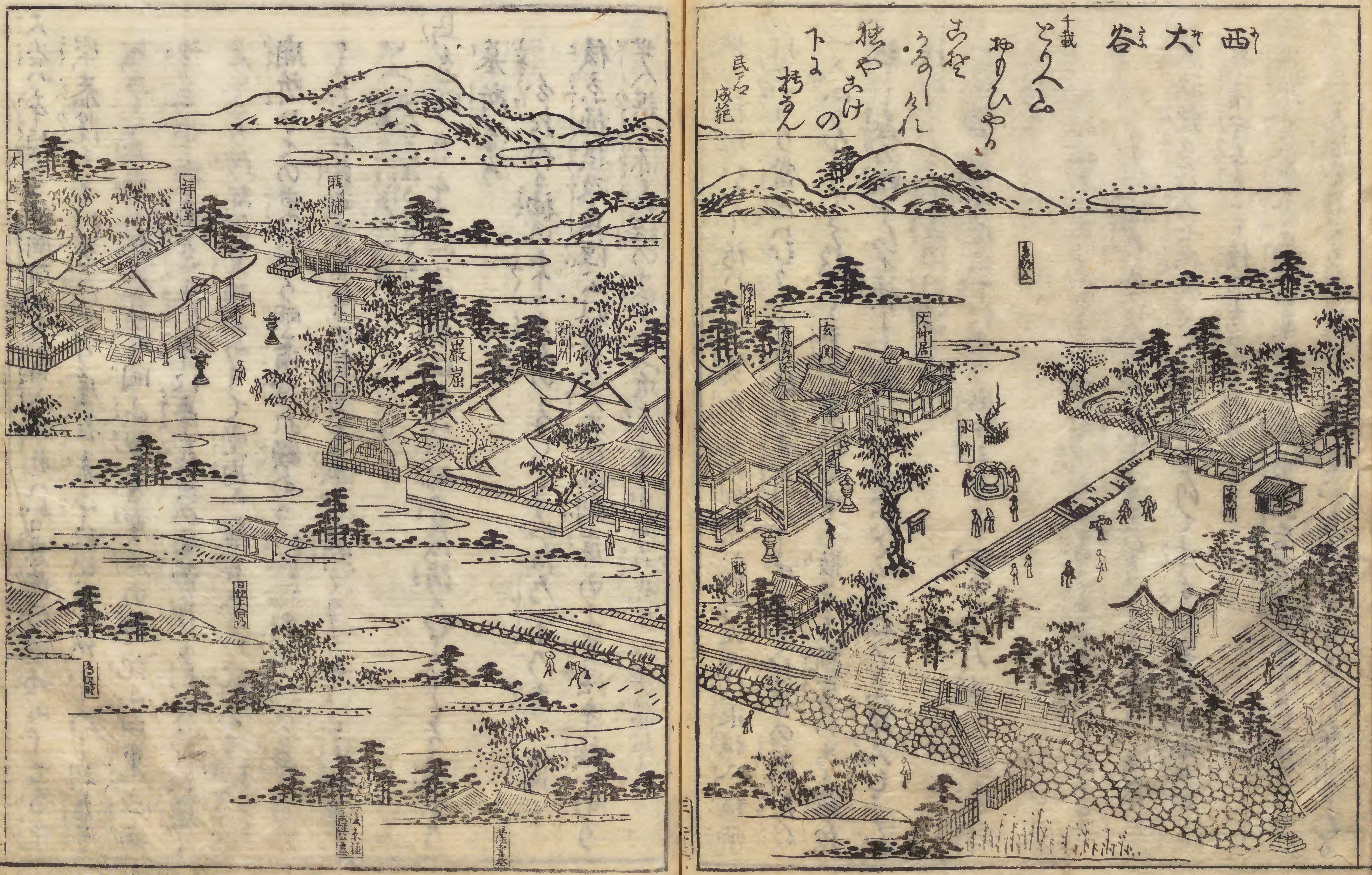
屋をつくりてまつらせし只佛殿を造りて大悲の像を安置し奉れり　鹿間塚ハ此地にあり
脇士地藏毘沙門天ハ延鎮法師の作なり田村丸延暦二十年に詔を
うけて東夷征罰の時此本尊に祈りしかバ観世音地藏毘沙門天彼
戦場に現じ給ひて悉く退治し給ふ同廿四年に田村丸長岡宮府
に宣旨を蒙りて堂塔を建立し勅願所となし又大同二年紫宸殿を
をもひて伽藍となし観音寺を改て清水寺と號せり
奥之院の本尊ハ千手觀音の立像なり此地ハ延鎮法師草菴
の跡なりとぞ
阿弥陀堂ハ瀧山寺と號す本尊ハ阿弥陀佛の坐像安置す文治
四年五月十五日法然上人瀧山寺にて不断常行念佛を開闢し給ふ
今ここに退轉なし朝倉堂ハ越前の國司朝倉弾正貞景是を建立し
田村堂又ハ田村将軍鈴鹿權現行叡延鎮等の像を安置し
梟水ハ中門の西にあり靈泉にして地中より涌出る事寒暑に絶ず

地主権現ハ祭神ハ大己貴命なり例祭ハ四月九日清水坂八坂郷
の祭なり當山ハむかしより櫻の名所にして春も弥生の比ハ花盛
一入にうるはしくさながら雲とも見えれど雪と散りて飄客のおもひを
動し盃のかずそひて詠よき詩作りてたえまなく絶えむまで
作けしも春色の風流なり
音羽瀧ハ奥之院の下にあり瀧口三すぢ下西の方へ落つ四季増
減なし

新古今
音羽山さやかに見ゆる白雲を明ぬと告る鳥の声かな　高倉院

家百首
みうまん清水山の瀧ばせハむかしをくみにさかりかり　為盛

瓜献観音ハ悪七兵衛景清爪をもて千手観音を石面に彫し
景清守本尊も傍の岩窟にあり
子安観音ハ車舎馬止の南にあり光明皇后孝謙帝を安産し給ひ
しも天照太神より授り給ひし一寸八分の観音を今本尊なる胎内にこむる


西大谷
千載
とりべ山おもひやるこそかなしけれひとりや苔の下に朽ちなん
民部卿成範

大谷ハ本願寺の廟所なり當山初名ハ智恩院の境地にしてありし
崇泰院にそれが遺跡あり慶長年中に此ところに移りし初舊号
なく大谷と称す當寺開山親鸞聖人の傳記に曰東山西
麓鳥部野南の邊延仁寺にて奉葬其の由縁をもってここに遷し
奉るより阿弥陀堂西面にして堂内に龍谷山といふ額あり 寂如上人の筆なり
廟所ハその東にあり明著堂といふ額あり 法上人の筆なり 對面所の庭上南の
かたに石窟あり當寺の什寶を蔵むる所とす俗よびて窟と
いふ

鳥邉野 或ハ鳥部山ハ清水坂南ハ小松谷をかぎりむかしより諸宗の（大谷より清閑寺へいたる細川を延仁寺といふ）
墓所なり

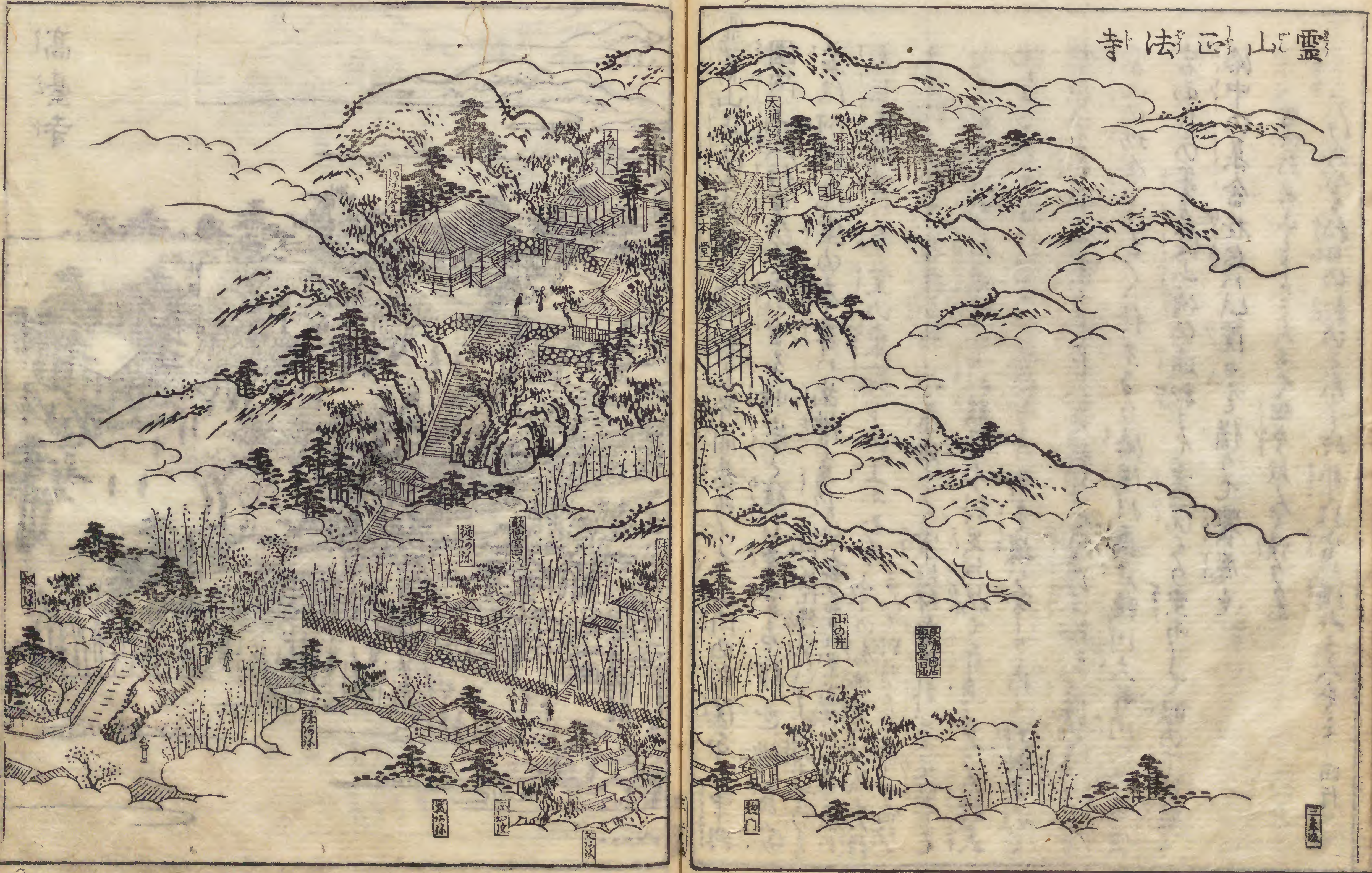
玉葉和歌
なき人の袖の泉にゐるべのうすくくれゆく紫乃雲　俊成

後京極摂政良経公の墓ハ大谷の北側岸の上要法寺領にあり
世人誤て源義経の墓といふ近年書家烏石先生碑の銘を建る

霊鷲山正法寺ハ往昔傳教大師開基にして山門の別院なり中興
國阿上人に及んで宗旨を時宗と改む本堂ハ釋迦佛を安
置し阿弥陀堂の本尊ハ歯佛と号く（此阿弥陀佛ハ笑ひ給ひ相好にて御口より歯見えたまふ故世に歯佛の如来と號く）
天照太神宮ハ本堂の東廊下の上にあり 此所の念佛堂ハ法然上人別時念仏を修し給ひ旧跡なり
生國阿上人ハ大菩提心にして慈悲ふかく常に伊勢太神宮へ足駄をはき
あて参宮ありし道中に於て骸骨あれバ足駄を脱て葬り通りたまひし 神宮
化したまひ上人の心を感じたまひ慈悲心より出る事を讃たまひて神勅ありしぞ
やがて参宮しの故に参宮の人ハ其途の事を除に参ふれバ其穢を遁るるとぞ
當山の坊舎ハいとおほく絶景なり洛陽の萬戸鴨川大井川の二流愛
宕あたりの峯々淀山崎の通路まで書院より坐して眼の下に遮る
洛中の集会社寺ハ此院々を借りて饗應を

雪の朝東山ところにて眺望ある人と讀みけるに
家集
さけのぼる朝日の影のさしてまた都の雪ハ消みきえんところ　西行

靈山正法寺



高臺寺
白山嶺
傘亭
祖堂
方丈
天神社

鷲峰山高臺寺ハ慶長年中に右府秀吉公北の政所御建立の菩提所也古ハ雲居寺にして自然居士住すところ宗旨ハ禅済家
中興開基ハ三江和尚なり
佛殿の本尊ハ釈迦佛迦葉阿難を安置す達磨大師の御厨子ハ政所公の御車を用ひらる方丈の重門ハ秀吉公の船屋形をもって営し給ふ客殿南向にして襖の画ハ土佐光信狩野永徳弘意了溪等なり欄物彩色美麗を尽せり本堂ハ本尊観音を安置す小方丈にハ秀吉公の詠給ひし和歌十首を額にかくる聖護院道澄法親王の御筆又開山堂の額ハ重闕と表して雪月堂の筆天井にハ政所公御車の上屋板用ひらる三江和尚常光院殿の像を安置す祖堂より北廊下を臥龍と云ふ霊屋堂の額あり是なれハ秀吉公北の政所の御魄舎あり長押に三十六歌仙をかく画ハ土佐光信和歌ハ八條智仁親王

の筆なり其外内張の画ハ狩野古右京の筆多し山上に傘亭ハ千利休が好む所なり岩栖洞ハ良れ山腹にあり古ハ岩栖院の旧跡なり
當寺ハ大木の桜数株ありて妖艶たる花の盛ハ園中に遊宴を催し名を惜むの輩も多し又秋の頃ハ萩の花いみじうみやびやかにいろへて詩人此に吟詠の節を思ふ是当境の佳観なり　姥桜ハ山下の坊中にあり　天満宮ハ其南の隣にあり
八坂法観寺ハ上宮太子の草創なり古ハ楼門伽藍鎮守等厳重なり破壊年経て今僅に残る
五重塔一基本尊ハ大日釈迦阿閦宝勝東かハに太子堂あり山のうへに薬堂には薬師如来弁財天歓喜天を安置すむかし浄蔵貴所此寺に住せられし時塔大いに傾く浄蔵塔に向ひ坐して持念に朝にあれば見るに塔直にして元の如し　元亨釈書意をとる

八坂法観寺

八坂の塔ハ夕月なるぞ
むら山さかの花盛ぞ
あはれゆかしき小夜更て
鐘の音かなしきをどかげき
目さむるごとくなりけるに
して塔のまへに佇み
なし御ぐるぐゆきく
の人見物せんと木戸
ほうりそうけれど
これなと奥へし
つらぬ一夜妻の縁
とろし 忠寛保
延享の頃まで有りしか
今ハ絶てなし

八坂庚申堂ハ塔の西にあり大黒山金剛寺延命院と号す本尊ハ青面金剛にして長三尺五寸大寶元年正月七日庚申に降臨したまふ日本三庚申の其一なり 摂州四天王寺 江戸浅草 照堰に聖徳太子大黒天を安置さる

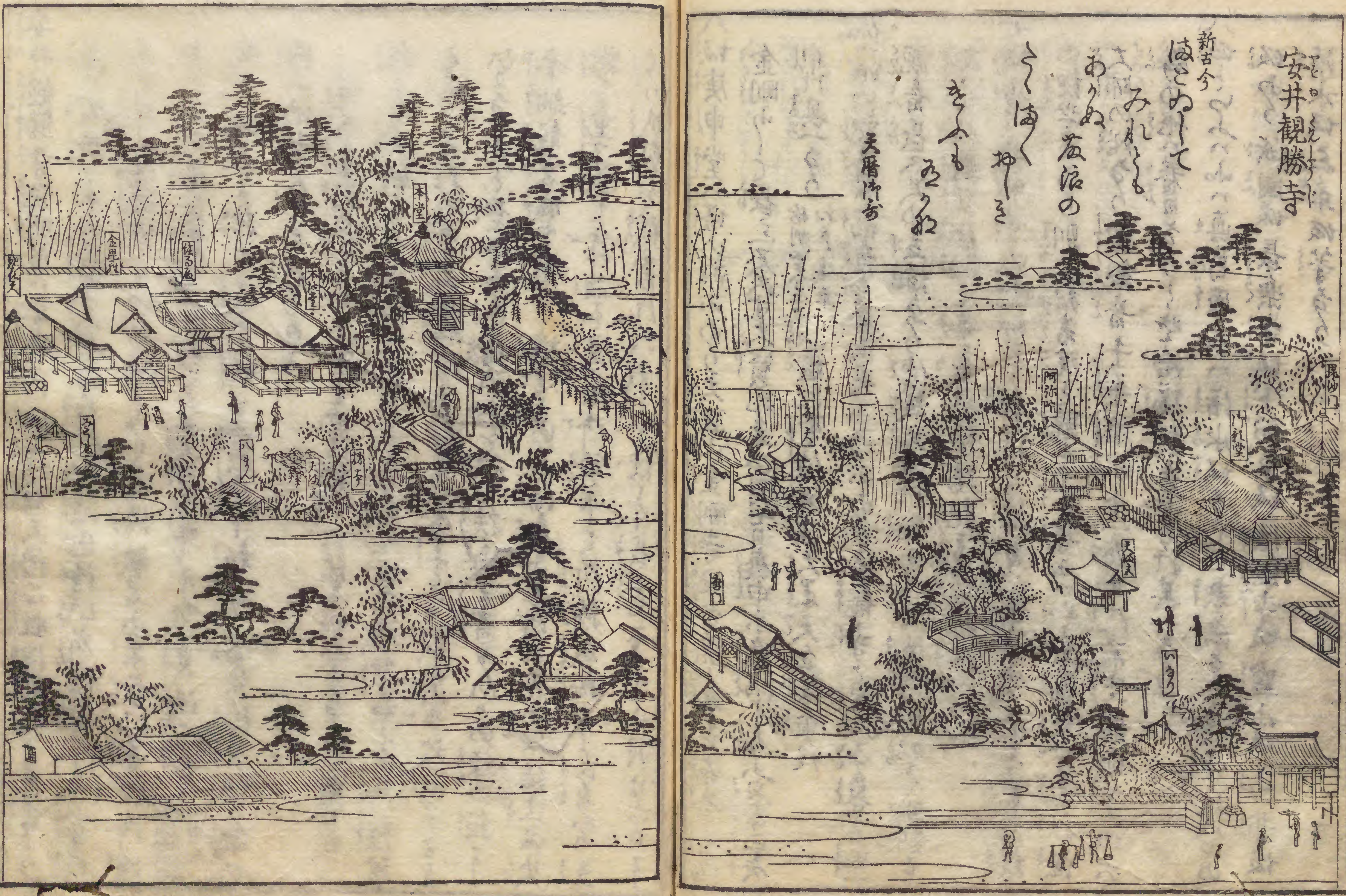
伽羅の観音ハ高台寺の南坂ふあり青龍寺と号す本尊ハ聖観音長五尺の立像なり傳教大師の作にして伽羅仏を以て彫刻す脇士ハ地藏毘沙門を安置す洛陽観音廻りの其一なり

七観音ハ庚申堂の北一町ばかりにあり宗旨ハ真言にして本尊ハ七躰の観世音なり則七観音院と號す中尊にハ如意輪観世音弘法大師の作なり聖観音千手准胝十一面馬頭不空羂索等の六躰の作ハ春日なりとぞ洛陽観音廻りの其一なり

八坂といふハ北ハ真葛原南ハ清水坂すべての惣名なり其中に八ツの坂あり祇園坂長楽寺坂下河原坂法観寺坂霊山坂山ノ井坂清水坂三年坂等なり

安井観勝寺

新古今
まとゐして　みれとも　あかぬ藤浪の　たゝまく　をしき　けふも　あるかな
天暦御哥



安井観勝寺光明院ハ安井御門跡前大僧正性演再興しまふ古より
藤の名所にて崇徳天皇の后妃阿波内侍此所に住せまふ天皇保
元の乱に讃岐國へ行幸ましくて御所なる東帯の尊影御随
身二人の像を書てこの地なる皇后に送りまふ其後天皇 讃岐院ト申ス
配所松山に於て大乗経を書写し和歌一首を添まひて都の
内に納めんとて送りまふ

濱千鳥跡ハ都にかよへども身ハ松山に袮をのみぞなく　讃岐院

然るを少納言入道信西奏しけるハ若呪咀の御心やとて御経を
返しまねば帝大に憤りまひて大魔王となりて天下を悩さん
ひまふんと誓ひまふ御指の血を以て願文を書まひ經の箱に
奉納龍宮城に託し堆途として海底に沈めまふ海上に火
燃て童子出て舞踊を見せ御諾ひして所願成就をしまふ
なり爪髪を截まハ六年を経まひて長寛二年八月廿六日
崩御しまふ御年四十六讃州松山の白峰に葬りまつる 已上保元記に見えたり
御霊此地に来て夜々光を放つ故に光堂ともいふ後に大圓
法師といへる真言の名僧此所に来りて縁起を崇徳帝尊像を
現じ給ふの趣を示すべく大圓古今を奏達し詔を蒙りて
堂塔を建立しかの尊霊を鎮めまつり光明院と号しける佛殿の
本尊ハ准胝観音なり御影殿にハ後水尾院の宸翰明正院并に
東福門院の尊牌を安置しまつる又弘法大師の像あり奥の社ハ
崇徳天皇中の方金毘羅権現南の方源三位頼政世人おし
すべて安井の金毘羅と称し都下の諸人歩を運る事なし
金毘羅ハ一躰にして和光の塵をまじへ擁護の明眸をそゝ
ぎひ利生霊験いちじるしとぞ人ぞなる
當寺の門前を新更科と号し中秋にハ洛陽の騒客ここに集りて
東山の月を賞し今ハ家居繁く建ならびて風流を喪ふ

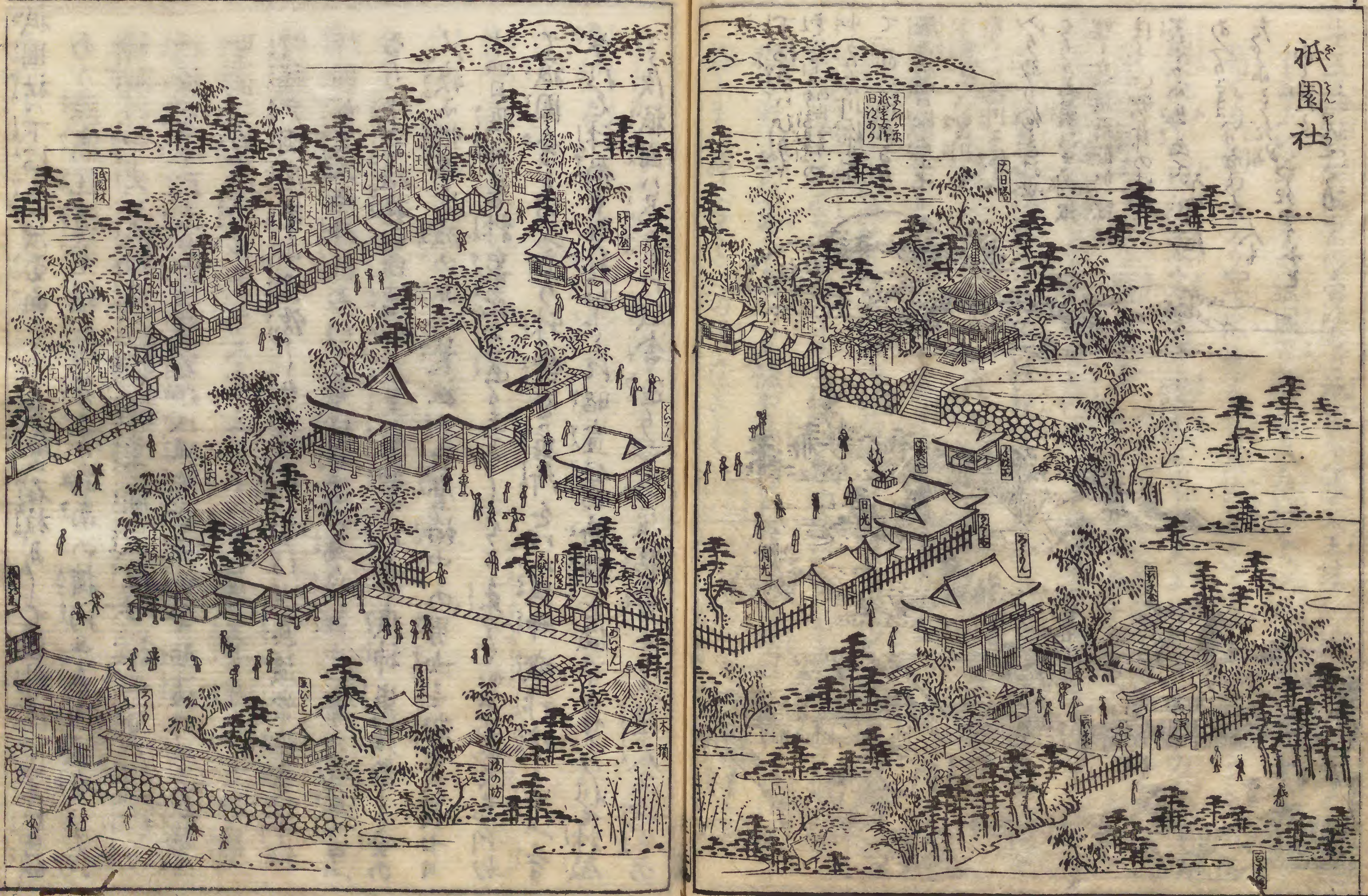
牛王地社ハ下河原の南にあり祇園牛頭天王播州広峯より神を遷座しける地なりとぞ祇園百度参りハ本社より此社に詣し此の歩を運ぶ昔より此例なりとかや下河原を百度大路とも名あり旧記に見えたり

菊水の井ハ旧所東方にあり澄泉にして茶に可なり菊桐の下流此かしこにあり故に號るとぞ（菊桐ハるゞれに石橋をかくる是より安井境内 紋に天の社のおもを通し建仁寺をさて鴨川に入）

蓮華池の古跡ハ下河原の西安井より通る民家の奥にありむかし此地に妙法院御門跡尊性法親王性恵法親王住せ給ふ古ハ此所小坂殿と号し四条の南なれバ綾小路宮とも号す（慶運ガ往生 秘解ニ曰）綾小路とかハ後高倉の皇子天台座主にそなハり侍しますせしが[illegible]住侍するとし小坂殿の棟に鷺のとまれバ其池の蛙とりくひ出しけるにかゞやり（拄然卿記）綾小路宮にわたりしますに小坂殿の棟にいつぞや縄をひかれしをしらべ彼にわしとひ出るを待に鵄や鳥のむれ其池の蛙とりくれバ御覧じ悲しみ給ひてなんとて人の語りしとぞ（小坂殿の地ハ其後ハ長楽寺の隆寛律師を 小坂殿とゆふよの逸するか後考あるべし）

下河原ハむかし愛宕の今ある墓の地なり山より谷川流出て一面の河原なり驟雨の時ハ漫水して下流すてハ宮川と号し鴨川に流れいつかり何まとれ世ちりの山崩れて川原埋み高楼飛観軒を揃るゝ○歌舞の妓婦花やかに出立て かのあれあそびさまいかならん 人もたゞふさぬ べれゆうかをあそびと云んとかり

祇園社



祇園社ハ下に云がごとく南面して鳥居ハ石柱にして感神院といふ竪額
あり照高院道晃親王の筆なり西南の楼門に左右の御随身あり
神殿ハ中央ハ大政所 牛頭天王 素戔烏尊垂跡 東ノ間ハ八王子 五男三女 西ノ間ハ稲田姫 本御前
抑祇園牛頭天王ハ愛宕郡八坂郷感神院に勧請せし濫觴ハ
聖武天皇の御宇天平五年三月十八日吉備大臣唐土より帰朝の
時播磨国広峯に垂跡したまふ崇奉り其後常住寺の十禅
師円如上人に神託ありて帝城守護の為貞観十一年に遷座したまふ
なり中臣猿松に曰清和天皇貞観十八年疫神崇をなして世の
人疾に悩む此の時ノ曩祖日良麿洛中の男女を将て六月七日
十四日疫神を神泉苑に送るその後年々かくのごとく恒例
て祇園会といふなり神輿を置所をバ八坂郷感神院といふ寺
なれども神殿もあれバ昭宣公の御殿を渡してうつされて神殿
と成祇園ハ為常の殿舎造りの異に精舎といふ後人又祇園の
名をかへたり 續古事談曰 祇園の宝殿の中にハ龍穴ありといふ延久の
頃梨本の座主 天台梶井御門主 其深さをはからんとせしにそれバ五十丈
にあまりてなを底なしとぞ
善御前ハ素戔烏の御子なり後見殿ハ大己貴命とか其外摂社
末社ハ図画にあらハすべし三大師ハ神殿東の庇の間にあり安永
七年絵馬堂の西にうつす 日本紀略記ニ曰天延元年五月七日以祇園為天台別院
薬師堂ハ観慶寺と号す本尊ハ薬師如来伝教大師の作陽成院
の勅願所として開基ハ円如上人といふ 当寺の諸縁に棒木あるし
祇園御霊会六月七日十四日山鉾の行粧祭礼の儀式其外五月廿九日
六月十八日の神楽洛中等世の知る所なれバ委く記さるに及バず洛陽の
祭礼多しといへども此会ハ殊に壮観のなべくしきなれバはらくつ見にくまし
なり臨時祭ハ延年三月十五日に執行あり 古ハ六月十五日にて走馬勅楽東遊御幣を感神院にたてまつる日本略記にみへたり
久しく絶けの神事ハ元朝寅の刻なり天下安全の御祈祷なり

新古今
桜さく遠山鳥のしだりおのなかなかし日もあかぬ色かな
太上天皇

それ桜ハ本朝風土の名産なり其種凡六十九品ありとぞ殊に洛東の地勢温純にして桜樹相應し清香他境に勝れたり中にも桜樹いまだあるが故きりたむのしるし桜花の詩数首是其證なり桜桃の桜の字ならずして桜れ文字なし今清朝の人長崎往来ふ桜の実を携へて帝京ふうへて実生しところくに鉢植なして賞翫せらるゝとかや

金玉山雙林寺
本堂

東大谷

金玉山雙林寺ハ高臺寺の北にあり古ハ天台宗の別院にして傳教大師の開基なり至徳年中國阿上人移住して時宗と改む本尊ハ藥師如來にして傳教大師の作なり鎮守ハ天照太神宮東の丘にあり西行の庵西行の塔あり此所に幽居しかひ建久九年二月十五日に入寂したまふ又當寺の櫻ハ西行法師殊にひつかれに愛したまへりとぞ性照の塔ハ平判官康頼入道なり此ほとりに山荘ありて左流より歸洛の後庵にてさらに籠居してうつし首編を著ハせり寶物集といふ是也語をなしたるなり（康頼浮世にある時寶をあつめて辨し真の寶ハ佛の道なりといふこと説を引て佛教にいれしむるの書なり之恵あり）頓阿の塔ありそれより四条道場金蓮寺にすんで後ハ雙林寺に閑居し寂したまふ（艸菴集ハ此地にて撰しけるとぞ）

當寺の院々も風景ありて洛陽交遊の勝地なり春秋ともに酬歌の聲間斷なし

近年都鄙の騒人文墨とまのけ此地に墳塋をいとなむもの多し洛東の佳境なれバ貴しとうとて爲行の事ありて大ぶる不絶なり

大谷ハ雙林寺に隣りて艮にあり東本願寺の祖廟なり阿弥陀堂乃本尊ハ安阿弥の作親鸞聖人の廟塔ハ後の山腹にして境内上にあり虎石あり石の形虎に似たれバ名とせり此石ハそのかみ開山聖人誕生の地柳馬場押小路虎石町にありしを秀吉公の御時伏見城中に移すしかるに其後今の地にうつされしとぞ聖人の御墓をそれより免東本願寺の境内七条の北にあり（世の人旧地を御墓町とよぶ）まさる此地に遷して寛永年中に造営あり廟前の荘厳みやびやかに微妙つくせり（大谷の名義ハ初名に載る）おほく花頂山の此地にも櫻多くして弥生乃旧號をとりて名づくるなり頃ハ貴賤群をなせり

東漸寺本住寺ハ大谷の南より登りて山腹にあり共に日蓮宗にして本能寺の末派なり

真葛原ハ祇園林の東知恩院の南をいふ

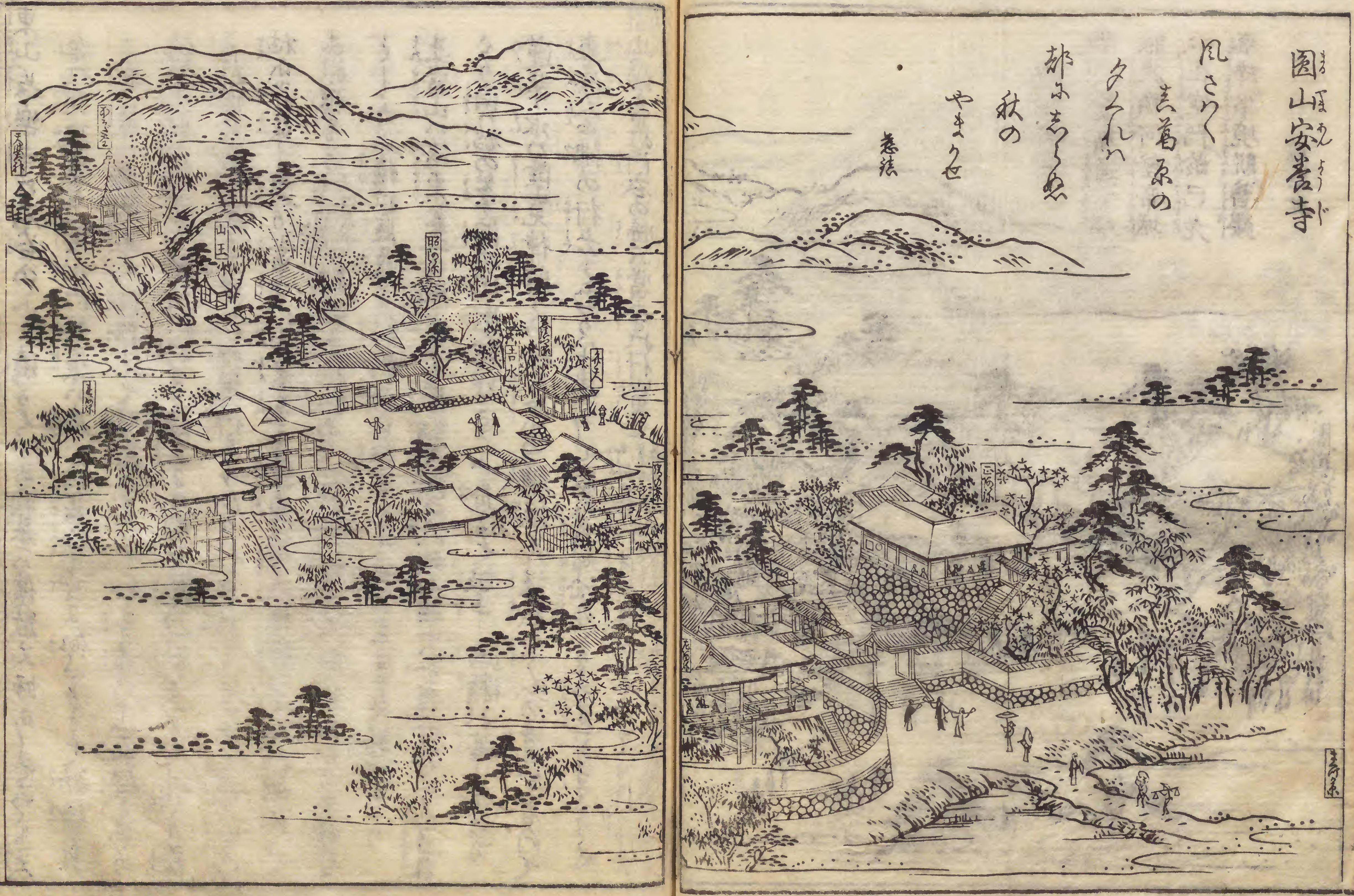
祇園女御の旧跡ハ雙林寺門前の北にあり（東西八間南北五間）此地を耕せんとすれバ祟ありとぞ

東山長樂寺

遊長樂寺

路迷鷲嶺通靈崛
眼渡鴨河望帝城
心在空門齡已老
須辭俗境脫簪纓

藤李經


圓山安養寺
風さはく
真葛原の
夕くれは
都に志らぬ
秋の
やまかせ
慈鎮
山王

東山長樂寺ハ大谷の北に隣りそのかみ開基ハ傳教大師にしてむかしハ天
台の別院なり當山の致景ハ唐土の長樂寺に似たりとて斯號お
くるぞ後ハ國阿上人住持して時宗とあらたむ本尊ハ十一面観音なり
傳教大師唐土より帰朝の折から海上にて龍神形をあらハし頭上の観
音の像を戴て来る大師礼拝渇仰ありけれバ忽ちしてかの尊像衣乃
袖に飛来しめ入り當寺の本尊是也臺座の下の蟠龍ハ大師の作にして
其の謂なり 已上縁起 辨財天の社ありこれ神形も大師制作にして鎮守
としのふ傍の庭造ハ相阿弥の作にして世に名ある勝地なり
夫當山ハ洛東第一の風景にて鳳城九陌の大路小路ハ加茂二葉山大宮森
なり南ハ鳩の峯淀の川瀬などもさらに舟まで眼中に鳥精の容とぞなる
蓮華水ハ隆寛律師といふ台宗の僧後にハ法然上人の弟子となりて
専修念佛の行者となり八十歳にして寂す其時池の水にうつる茎と花ぞとぞ
安徳帝の御衣の幢ハ當寺の什寶也 御母建礼門院御飾をおろさせ給ふ時御戒師ハ長樂寺の阿證上人にて御布施として先帝の御直衣をたまふ

圓山安養寺ハ長樂寺の北にあり是も山門の別院にして傳教大師の開基也
本尊の阿弥陀如来ハ安阿弥の作建久年中に慈鎮和尚ここに住して其後
時宗と改め國阿上人住職せりむかし盲人源照といふ者琵琶の妙曲
を奏せしかバ天聴に達し後小松院の恩寵を蒙り紫衣を賜ふ是盲人
紫衣の始といふ源照それより當山に祈誓し世に名誉あらんことを
ねがひ給ひて願望成就せしかバ當寺の本堂を建立す
吉水の井ハ鎮守辨財天の傍にあり 慈鎮和尚此地に住み給ひし吉水和尚といふ 青蓮院宮御代々の
法親王灌頂の時古の吉水閼伽として汲源文に例式の列を記し
来臨しあひ御手ずから汲せられしといふ
當山坊中の書院ハ形ちざして高楼にありて清奇典麗いはん方なし
庭中にハ石を畳んで飛泉を催し池を鑿てハ魚を放つ緑樹芳艸四季の
花絶ず躑躅の履の音涼しく中にも多藏庵 阿弥の庭ハ相阿弥の作にして左阿弥
也 左阿弥の書院の画ハ雪渓の筆なりとぞ此法場遥の地多けれど此地に勝るハなし

知恩教院
方丈
本堂
一心院
番所

華頂山大谷寺知恩教院は浄土宗の總本寺にして鎮西流義なり元祖圓光大師宗風開發の霊地にして吉水は禅房なり旧跡あり初めは東の山桜今は勢至堂の地にして大師入寂し給ふところ也星霜かさなりて山門十二代の座主青蓮院慈法和尚法然上人の弘法に随信しあひ此地を寄附し給ふ昔は今の圓山と都境一面にして吉水といふ古は叡嶽の別院南禅院にして慈慧大師草創の地なりといふ満誉和尚の代に至って台命を蒙り嶮岨を穿て平坦とし今のごとく伽藍御建営ある

洛東第一の山門に揭る華頂山の額は霊元法皇の宸筆なり本堂大谷寺大廈なりの額は後奈良院の宸筆なり須弥の壇上には圓光大師の像を安置す又西の間には翠簾を巻上げて壇上に神牌を崇奉る大師の廟塔は東の山上にあり勢至堂に揭る知恩教院の額は後柏原院の宸筆之本尊勢至菩薩は安阿弥の作也満誉上人化人より授与し給へる像也紫雲石は勢至堂の傍にあり大師入寂の時聖衆来迎し紫雲水面に映じ異香水気に遺りしといふ

一心院は真南にありて本尊阿弥陀佛は安阿弥の作也

抑元祖大師の傳記を鑑るに其祖は久米南條稲岡の産にて父は久米押領使

時国母ハ秦氏之子なれバ秋て夫婦諸ともに佛神を祈つゝ秦氏夢に
剃刀を飲と見て則妊身となり長承二年四月七日午刻男子を誕む時紫雲
空にたなびき白幡二流降くだりて館の西なる椋の木に止り鈴鐸四方にひゞき
紋彩日にかゝやき七夜を経て天に昇る是よりし此樹を誕生椋と号す後に佛
閣を建て誕生寺と號して今にあり赤子の字を勢至と号け給ふハ髪を打
の讃より叡智にしてやゝもすれバ西の壁に向ふの癖あり九歳にして日国の菩提
寺の室に入て学問をなす勧学と云人倩に児の量を覩りて是只人にあらず
徒に邊鄙の塵に埋まんや叙抑て比叡山西塔北谷持寶房源光のもとに送る
以て勧学が書翰に曰進上大聖文殊一體とあり時ハ久安三年二月十三日入洛して
勧学が書を持寶房に呈ければ源光書を披見して文殊の像とは小児のこと
上洛せられし使者ハ唯やく児の聰明なるを賀せり則十五日に登山し
源光試にまづ四教義を授けるに義をさして不審をうち難ずる所ある天台の要論
なり不思議のおもひをなし抵滲もみしていかで此人を弟子とせんやと同年四
月八日に児を相具して功徳院の阿闍梨皇圓のもとに入室せしむ皇圓其ちれさぐれ
る夜闻て語て曰去ル夜の夢に満月室に入と見しが何で此人に逢ふべき前兆なり
とて悦喜したり同年十一月鬢髪を剃戒壇院にて大乗戒をうけられ漸く恵
解天然にして四教五時の廃立かつて紛ず一心三観の妙理玉をみがく所立の義師
の教にまさりける阿闍梨に感して曰学道を法とぞ大業をとげ天台の棟梁となれと
ありけれど上人元より名利の学業なりとて息師席を辞して久安六年九月
十二日十八歳にして西塔黒谷の慈眼房叡空のもとに到て我幼稚より隠遁の
志願ふかゝりし宿々たゞ和尚にて出離の心をおこしたる是法然道理の聖なりと
感じて法然房と号し実名ハ源光の源と叡空の空を摘んで源空と號す黒谷に
蟄居をなし出要を求るの心切なればたゞ生死の道より生死を離るべきと一切経を
披見せらる事五遍なり然とも諸の経論よりてはらく思惟せられしかども
あまとも高し遂に恵心の往生要集并善導和尚の釋義を以て指南とせり
かの釋にハ乱相の凡夫称名の行によりて順次に浄土に生るべき旨を判せり蔵経

彼是の為に是を窮る事三遍之遂に其釋義に一心專念弥陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故之文に至りて末世の凡夫弥陀の名号を念ぜバ彼佛の願に叶ふして必淨土往生を得るとさとりて伏し承安五年の春四十三歳にして餘行を捨て偏に念佛に帰入せり其ころ法然上人の宗風日本にひろまりしかバ山門の悪徒これを破せんとし或ハ大原にて問答ありしかとも皆念佛の理に伏せり建久二年の春ハ後鳥羽院の逆鱗によりて四国に左遷せられしかども承元元年十二月に勅許を蒙り帰京して東山大谷に閑栖し給ふ是當山の地なり遂に建暦二年正月廿五日午の剋法壽八十歳にて遷化しぬ其年より毎歳正月十九日より二七日の間大法會あり勅命に依て御忌と称し貴賤の群参する事ハ聖衆來迎の粧なり蘭麝の薫りハ布金に満て法筵の中日にハ知恩院宮法親王御焼香あり寺務の大僧正を初末派の衆僧大會の坐列を正し敬礼渇仰の分野なり去此不遠に極楽淨土を見る皆大師の厚徳顕然たりと謂つべし

洛陽の貴賤袖をつらねそのめくりを拝するゆゑ俗に御忌の衣裳くらべと名づくるなり

紫雲石ハ黒門の前にあり むかし此石より紫雲たなびく 胡麻の墓生して紫雲を結ぶ 塔中崇泰院にハ

其紫雲石ハ牛頭天王の文字あるを以て粟田天王の社内に

親鸞聖人廟塔の遺跡あり

大谷本願寺と號して八代蓮如上人の代文明年中まで此地にあり山門の悪徒宗義の繁栄を嫉んで不意に押寄て破却す

小鍛冶が井ハ山門の傍にあり

三条宗近名剱を打しとき此水を用ひしとぞ 附 當山ハ桜数株あり 糸桜 浅黄桜 世に名高し

白川の水上ハ志賀の山越より流れて東三條にてハ白川橋の名あり知恩院古門前を西に流れて大和大路より鴨川に落る

新千載

白川の絶ぬ流れを為そへて万代ちぎる友ちどりかな　法親王覺助

東三條金藏寺御猿堂ハ青蓮院御門跡の院内なり三猿の像ハ傳教大師の作

當寺の本尊ハ米地藏と号す傳教大師唐土より将来したまふ むかし貧女

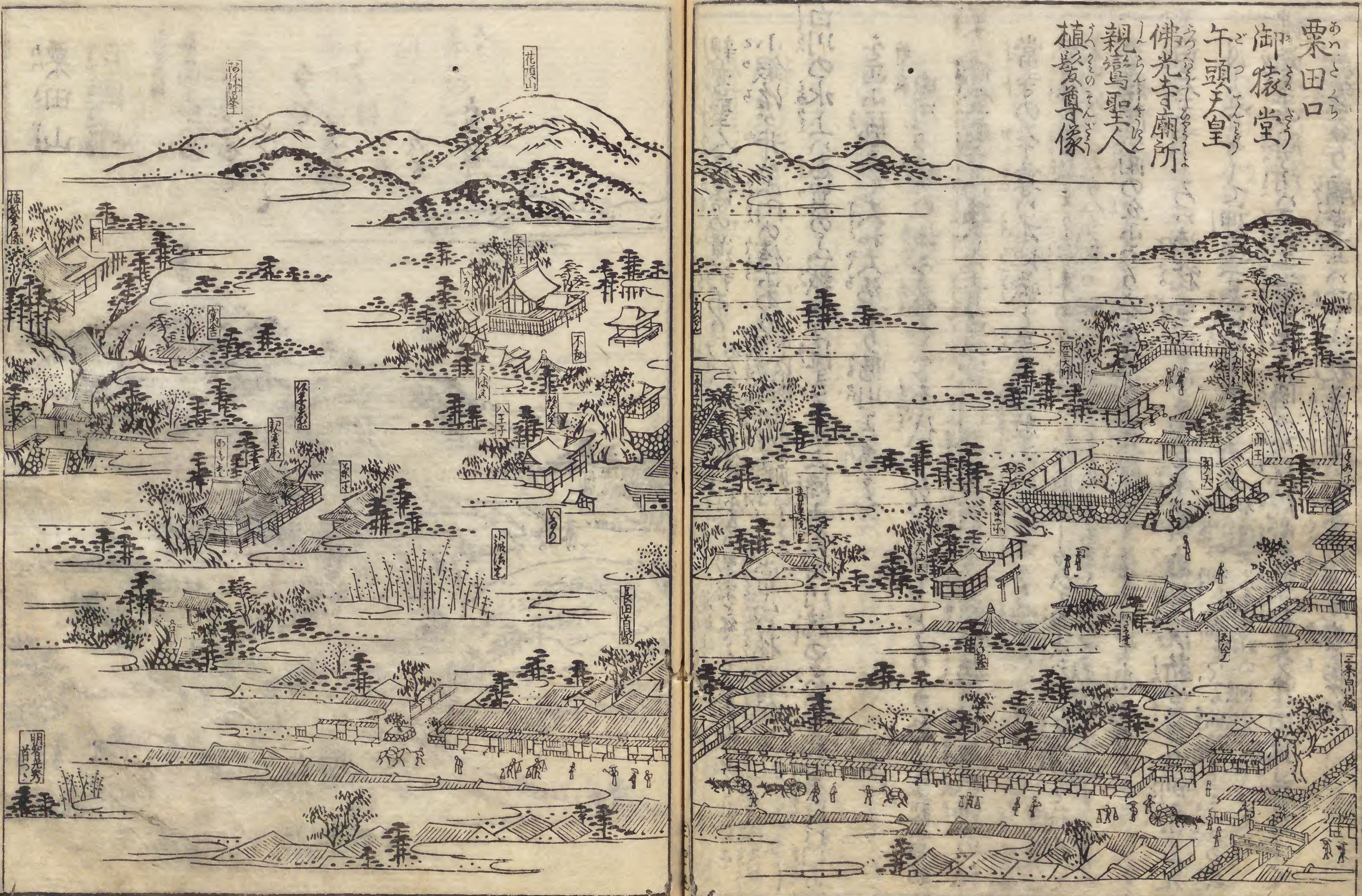
此尊像を宗敬する事年あり三猿なれバ感應しのび粮を充時ハ米を持来りて養中にあたへける故に永く貧窮をすくふ事により米地藏と号すとなり

尊勝院ハ南の丘にあり本尊ハ元三大師の坐像にして自作なり

粟田天王やしろハ御猿堂の東にあり本殿ハ感神院新宮なり例祭ハ九月十五日にして神輿一基鉾十五本あり

白川の細き橋をわたる曲ありして古よりの例式とせり

佛光寺の廟所ハ天王社の東に隣る阿弥陀堂ハ明和年中の再建にして[illegible]藤なり廟堂にハ開山親鸞聖人の畫像を安置す



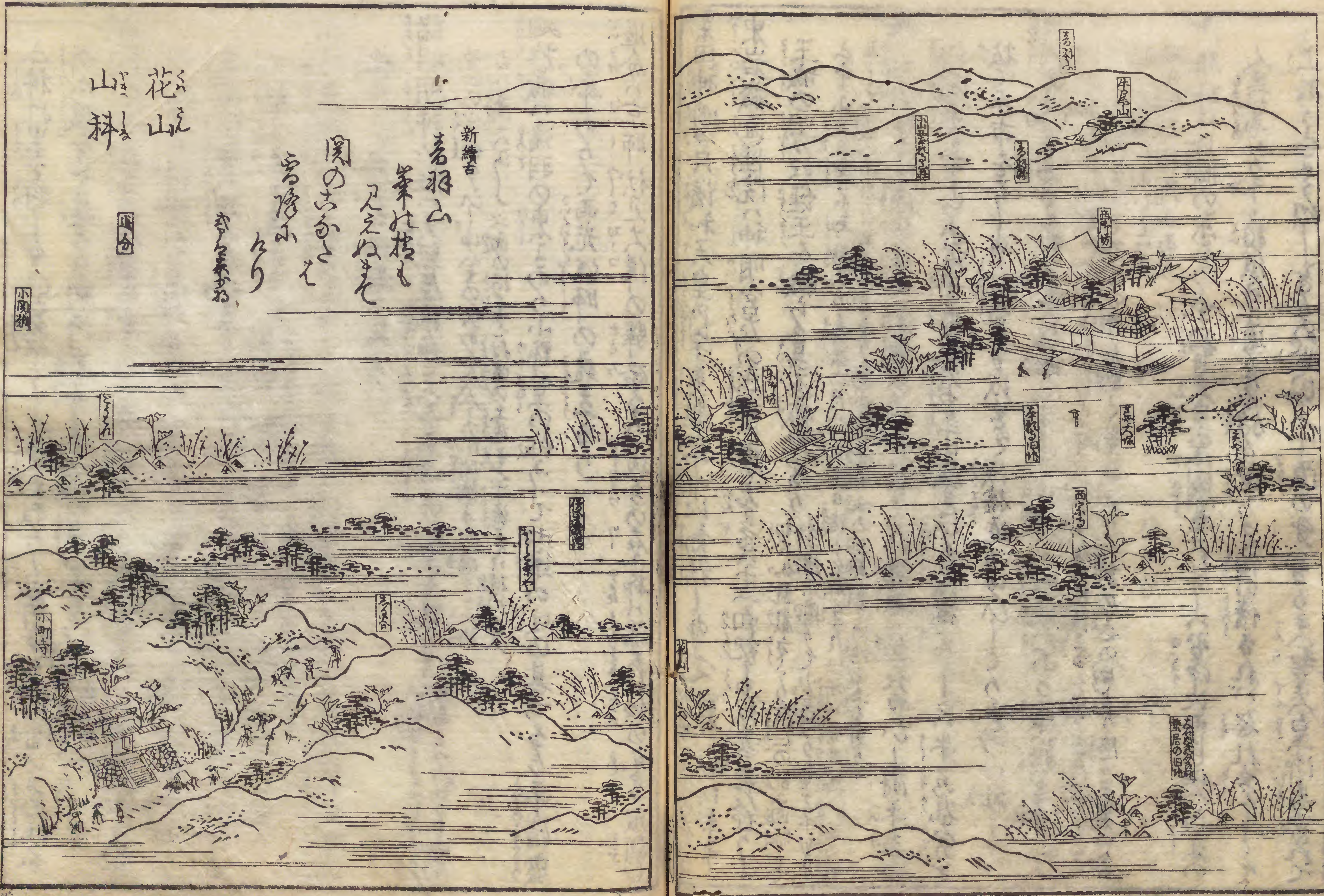
国立公文書館
National Archives of Japan

粟田山
日岡峠
古今六帖
喜撰法師
日の岡
神明宮

夫木
四宮河原
天智天皇陵

華頂山親鸞聖人植髪の尊像ハ佛光寺の廟所の东ニ隣る舊青蓮院御门
跡の院内ニ在せしが近年此地ニ移されて堂舎を遷し華頂山御堂
と称す宗旨ハ天台ニして親鸞宗義を極て正信偈文念佛和讃御文章
等の勤行あり本尊ハ阿弥陀佛の坐像を安座し右の壇上の厨子に此君
影を安す長三尺ニして立像なり小葵の直衣ニ紅梅の御衣を白紫の袍
甲形の指貫を着し雲繝縁の褥ニ坐て児童の御影なり抑此尊像ハ人皇
八十代高倉院御宇承安三年ニ聖人誕生ましまし御父ハ大織冠鎌足公の苗孫
有範卿と申御母ハ八幡太郎義家の嫡子對馬守義親の息女なり聖人幼年より
出離遁世の志願ましましけれハ九条の慈円青蓮院慈鎮和尚の許ニ来て髪を薙
御弟子となり範宴少納言卿と申して叡嶽無動寺ニ住て天台止観を開
発遂に難行を捨て易行ニ帰し本願念仏の一流を弘通しの慈鎮和尚聖人の
剃髪しの御顔を写しその剃たまひし髪を御頭ニ植座せられ是を植髪
影と號し一宗の門信徒日々ニまして繁昌の霊地とぞなりにける

粟田神明宮ハ清和天皇御宇貞観年中に勧請しあふく（朝日殿ハ坂路の太ふ在る当山よ橋り紅葉なゐし）
東岩藏真性院ハ神明宮たりの山上ニあり本尊ハ十一面観音を安座したまひし
王城の四方に経王を藏らる其石藏の一ツなり初メハ伽藍厳重なり應仁の乱ニ回禄して
山中ニ大日堂不動堂あり毎歳六月廿八日千日詣として群集す今僅ニ遺りて小堂あり其下の方ニ大日町と云
ありして當山の土を陶工ニ可なり粟田焼清水坂の土を築等此地の土を用ゆ此所ハ安井御門跡の領
蹴上水ハむかし源牛若丸金賣吉次ニ具せられ陸奥へ赴れたまひし时平家の
侍関原与市といふ者牛若の馬ニ年ニ戯れ此水を蹴上けしかハ牛若丸太刀を
抜て与市をはじめ郎等どもを多く伐捨通りたまひしより名づけ初しとぞ
日岡の峠ニ至る三町斗西ニ四面ニして其中ニ往還あり俗に姥が懐といふ
千本松毘沙門堂ハ街道の北ニあり峠の梅香庵ハ地蔵尊を安置す本食上人
住して坂路を造て牛馬の労を助く量救水ハ石郭の亀の口より漲る貴賤の飲
旅人の渇を止むといふ
碑の銘ハ接待所ニあり
御廟野ハ日岡の东をいふ天智天皇の御廟あるむかしハ此中にありしゆへ往来の
人馬駕ハ下り弓張通りし故里ちかく諸の傳ふれバ忍れありしとぞ
上形なる山より川しもあらぬ世ニ至て十陵の第一なり天智天皇御馬に召れて


花山
山科
新續古
追分
小関越
小町寺
牛尾山

山科の里を将しめひ忽然として登天ありし所なり御沓の落止る
所に陵を起建たり則御沓石とて陵の南にあり（天皇の御沓は石の上に落しとぞ）
吉祥山安祥寺は御廟の東にあり真言宗にして紀州高野山寶性院乃兼
帯所なり俗呼んで高野堂といふ本尊は十一面観音なり傍に地蔵堂あり
恵運僧都入唐の時将来しめふ地蔵尊なり当寺は染殿皇妃の御願にして
貞観元年の建立なり（初めの地は如意山嶺の谷にあり慶長年中今の地に移す故に如意山と号す当寺の境内なり）
山科毘沙門堂は天台宗にして御寺務は法親王なり本尊は毘沙門天の立
像にして開基は伝教大師なり
諸羽明神の社は天児屋根命天太玉命の二坐を鎮座なり（此社地より東を四の宮河原といふむかし延喜式）
（是四の宮住給ひしゆへ其名あり又今の小関越より流るゝ小川古は広大にして一面の河原也往還の土橋其下流これは摂川とて）
廻地蔵は諸羽の東にあり小野篁の作にして七道の辻の其一ツなり平清盛
の命ありて西光法師の建立なり
追分は京師伏見大津の駅路なり道分の石京都は銀花は紅の文字を刻む

音羽山又牛尾山ともいふ追分より東南の山なり音羽里小山村は道の方に
ありて一流の山川あり是を音羽川といふ是は山科音羽郷にして古より
和歌多し（延徳の頃高水寺殿三品花渓といふ官婦の此流を右にみて花に倚る山荘あり今西本願寺の別荘是なり）
て牛尾観音堂に至る道に安履石あり（行叡居士の沓也石上にありといふ）弘法腰掛石鉢
調子瀧音羽瀧也瀧の右にあり仙人窟五丈巌を左の嶋をのぼりて之
四丁にあり地獄の瀬は険路の左にありて硯石は其右にあり

新後撰　音羽山花咲ぬらし逢坂の関のこなたに匂ふ春風　宗尊親王
続後拾　穴さへに松吹風の音羽川わたりも涼し山乃下かげ　後西園寺入道
続古今　音羽川音けの波も岩越て関のこなたに来るはきかなり　定家
続古　時雨のみ音羽の里は近けれど旅の人はおとろへたれなし　前大臣

牛尾山法厳寺は七曲の上にあり真言宗にして本尊は十一面観音なり天智天皇
の御作照士は不動毘沙門天又行叡居士延鎮法師の像を安置れ
帝の社神明社あり（不動は天智帝の後にあり黒泥数金生水は堂前にあり智証大師の両品とぞ紺紙金泥の曼陀羅を書写しのへるぞ）

當寺ハむかし延鎮法師谷川の水上に行叡居士の沓を拾ひ大悲の仏現したまへる所に智せる霊場也 洛陽清水寺の縁起に委し 又沓ぬぎ付たり 古へ仏像数多ありて旧地ハ云々 故に清水の奥院と称しける

山科本願寺ハ旧地ハ花山の麓にあり第八代蓮如上人文明年中の建立也 實如證如三代住職しあひて宗風盛んにして堂舎漸々ひろく遂に佐々木定頼へ為に囲続に及ぶ 委ハ信長記 今山科御坊と称して東西本願寺の懸所二ヶ所あり 毎年三月廿五日蓮如上人の忌日也 蓮如上人の塚ハ旧地の西にあり實如上人の塚ハ本の野村東二町ばかり

花山ハ藩谷峠の東にあり元慶寺ハむかし僧正遍照住持して天台宗なり 本尊ハ薬師如来則遍照の作也 人皇五十五代の帝此寺に入らひて祝髪し給ふ これを花山院とぞ申ける

花山の法のこゝろ僧正遍照が家の桜のちりかゝるを見て

續古 あらし吹く花の都を桜花ちるとも名をや惜しき　　律師囲基

若集滅道と云ハ今花藩谷越をいふ 小野寺本尊地蔵尊ハ名号の文字を小野小町ふみを通して送りたまへる也 妄執の恋慕消滅の為に此像を作りて後園に蔵む

南禅寺門内 金地院

南禅寺
羊角嶺
神仙佳境
五鳳楼
南禪院

瑞龍山太平興國南禪禪寺は東之際のふもとにあり 舊は亀山法皇此處を居所とありしを
開山大明國師に賜て五山之上の號を蒙る當山の記に曰 右上皇亀山
院弘安年中に此地に離宮をいとなみ給ふ 正應のころ此宮中にあや
しき事ありて嬪妃大に恐れ給ふ 陰陽頭に占はしむるに故
最勝光院僧正道智といふ僧此地に棲む魔の僧正と称す其霊のたゝりて
當山を秘惜して障礙をなすといへり 故に顯密の諸師呪術を祈るに及ぶ
すゞ百計をもつて拱く 同四年東福の釋普門 當寺の開山なり無関和尚といふ謚大明國師 勅命を請て
二十の禪侶を率て宮中に安居し只何となく禪定をもつて坐禪しけるに
物怪跡を匿し上下安穏たり 上皇御感のあまり普門を礼して伽梨鉢盂
をうけ給ひ宮をあらためて寺となし給ふ 上皇は上の宮に安居し給ふ 下の宮を寺とし給ふ 今の龍淵
室これなり 上檀の鳴瀧の画は古法眼元信 之水呑の虎は探幽の筆なり 遂に命ありて佛殿を創建し給ふ是なり
釋迦佛の坐像脇士は文殊普賢なり又金剛力士の二軀を安置す
此力士の霊像は四条の運慶が作なり 南の塔中にあり 亀山法皇の神牌を安置す

像には達磨百丈臨濟の像を安置す 佛殿に帰雲峰堂といふ竪額あり 山門は五鳳楼と
號して寛永年中藤堂高虎の再建なり 門の扉を多く唐木を用いてこれを造る
白檀二株山門の側にあり石の大燈籠一基山門の外にあり高さ丈余
石は白川の産にて希代の大燈籠なり蓋石の寶形に二ッ引龍の紋あり
又地輪の上に文字あり 南禪寺山門石燈籠寛永五年九月十九日 佐久間大膳亮平勝之寄進之
奉龍池の乾にあり是當山の鎮守なり 綾戸明神は もし行交の通衢に綾戸小路といふ所あり 是に住せる帝の牛飼の舎人死して霊
あり土人恐れて小祠を建る 寛永年中に伯英俊和尚大祠を造りて山門の境致とすとぞ 南禪院には亀山法皇の震影を
安置す 金地院には御宮ありて白砂に鳳凰竹を植る 楼門左右には随身の
像を安置す 當院の開祖は大業和尚五山僧録司の號を蒙る 銘は東の峯
獨秀峯にあり 大僧正道智常に此瀑布を愛し滅後に霊をとゞめて 道智は是明峯
當寺の護法神なり 社を瀧の側に建てこれを神仙佳境といふ 瀧の南にあり
寺入道摂政道家卿の息なり 三井寺の長吏 藏春峡 聟雷橋といふ
禪林寺にして天狗の僧正ともいふ
羊角嶺は天授院の東の峰をいふなり

永観堂
祖師堂
本堂
悲田梅
廟堂
厨
玄関
方丈
経蔵

若王子

聖衆来迎山禅林寺永観堂ハ南禅寺の北に隣てあり浄土宗にして西山流之
本堂の阿弥陀如来を顧本尊と號す長三尺余の立像なり當寺ハ舊
清和天皇の勅願所として真紹僧都の草創也中興の開基永観
律師永保二年二月十五日晨朝衆僧とゝもに行道の念佛をおしまん
信感はなはだしくして乾の方にてしばらく躊躇せり本尊壇よりおり
給ひて永観をさきとして顧命し給ふ律師感涙を流し是ぞ末世乃衆
生を摂取引接の證なりとて自ら其の由縁を記されしなり 今當寺ある御影ハ粟山院
の皇子深観僧都の建立なり南都東大寺の勅進職に補せらる四十二祖 祖師堂にハ
にして此地に閑居し給ふこれ浄土を願ひて往生十因等の書を著せり 當山ハもと真言宗なり
善導大師 自作 圓光大師西山上人の三尊を安座ス 池ノ大納言頼盛卿の恩静
遍此所に住して深空の滅後撰択集を披閲して一向専修の義を立 源頼朝卿 經蔵
ふうらく此に帰依しありて武運長久の為に大般若経を轉讀を其 所今にあり
の額法海の二字ハ共糜高泉の筆なり聖衆来迎の松ハ当寺前にあり
夜四方に異香薫し音楽聞へて菩薩来集の粧ひ此松の枝にありしと
山号ハ此謂 中門のたに法化の学校あり会下と称ス 總堂にハ耳義殿とらへあり

霊芝山光雲寺

正東山若王子ハ永観堂の北に隣り天台宗にして修験道の霊蹟也聖
護院に属す本社は熊野三所権現宮ハ後白河法皇の勧請と傳ふ若一
王子を鎮座す観音堂ハ那智山の本地十一面観世音を安置す瀧湯観音の
其一南に山下に瀧あり 那智の瀧をうつせり当山むかしハ宮殿壮麗にして殊勝花の名所なり應仁の兵火にかゝりて荒廢に及ぶといふ
霊芝山光雲寺ハ若王子の北に隣る禅宗にして南禅寺天授庵英中和尚の
再興也仏殿の本尊ハ釈迦仏を安置す此地ハ南霊芝生茂りて光を空に
映じける故山號とす叡覧ありて霊場なるを感じ給ひ東福門院より當
寺を御建営ありしと也瑪瑙石の手洗鉢ハ仏殿の後にあり当寺の奇観なり
鹿ヶ谷ハ霊鑑寺御殿の前を東に入る談合谷ハ其奥にして二町斗にありむかし
俊寛僧都の山荘なり 新大納言成親平判官康頼等此所に会合し平家を滅さん謀を企しといふ 如意嶽ハ東の峯に
して楼門瀧ハ大木の古松四五本の下にあり鹿ヶ谷より八町許の奥なり瀧の高サ一丈余にして長さ
又大雨の後にハ水増て近に比ぶ叡嶽の南に隣て白き砂を埋ミ谷深くして
万仞の青巌路を遮りて厳深に迫し処衆山嶮難にして常に人跡稀なり

住蓮山安楽寺ハ鹿谷にあり本尊ハ阿弥陀佛の坐像にして恵心の作なり
脇士ハ観音勢至を安置す共に運慶の作なり當寺ハ法然上人
如法念佛を修し給ひし地なり徒弟住蓮安楽の二僧に附属し給ふ
後鳥羽院の愛妃松虫鈴虫の二婦一向専修の勧に入尼んで此庵室へ来り
尼と成 上皇大に逆鱗ありて二人の僧を刑し法然上人を四国に左遷す
其後年経て念仏仏法の旧跡すたれたるを歎じ住蓮安楽の二師を開山とす
善気山万無寺ハ同所にあり本尊ハ阿弥陀佛の坐像にして恵心の作開基
万無心上人古ハ法然上人草庵を営み専修念佛を修し給ふ旧蹟ゆへ故に法然
院とも號す本堂のおくに銅像の地蔵尊を安置す客殿の庭に霊水あり銘
を善気水といふ此地ハ松風蕭然としてつねに鉦の音たへず六時禮讃の聲
ハ幽谷に谺し寂寥として峯の月おのづからすみ廬山の白蓮社
ともたとへつべし 清浄无塵の佛界なり 世に六字詰の念佛を鹿ヶ谷流といふハ此寺の
称名を唱ふる
なり

住蓮山安楽寺

鹿ヶ谷法然院
本堂
客殿
経蔵

黒谷
金戒光明寺
本堂
勢至堂

紫雲山金戒光明寺黒谷ハ浄土鎮西四ケの一本寺なり元祖円光大師の旧跡にして叡山西塔の黒谷をうつして新黒谷と称す本尊にハ元祖大師の像を安置す脇壇の厨子にハ親鸞聖人の像あり共に自作なり阿弥陀堂の本尊ハ恵心の作なり観音堂の本尊ハ行基の作にして千手の像を安置す

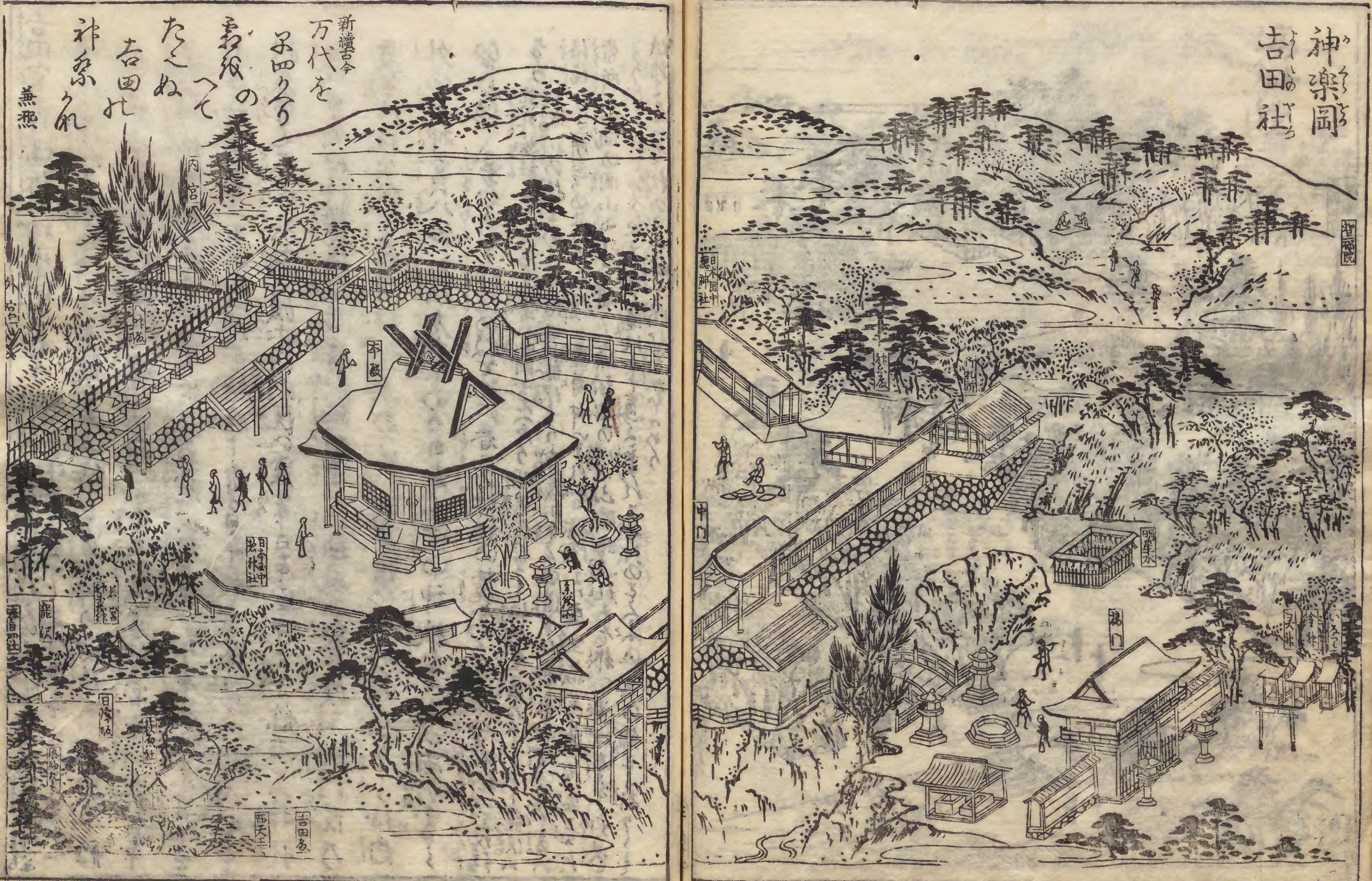
勢至堂ハ法然上人の廟塔あり（則勢至菩薩の化現なるの御廟塔宝座の下に五輪の石塔あり）熊谷堂ハ蓮生法師自作の像たま敦盛の画像を安置す二重塔の文殊菩薩ハ日本三文殊の其一なり（丹後切戸和州安倍）脇士ハ（維摩居士優填王善財童子等の四像を安置すこれを世に天照春日八幡住吉の神像といふ）紫雲石ハ塔の北にあり元祖大師開発の時此石に紫雲たなびき異香薫じたるとなり（此所紫雲山の号ハ此謂なり）鎧池掛松ハ熊谷次郎直実上人の教に帰入し着せし鎧を此池にて洗ひ松に懸置しと也（蓮生法師ハ承元二年九月十四日往生をとげ諸方へ自身縞あらハし道俗群集の房坂囲繞し共に高声に念仏し）しうんハ衆紫雲たなびけ西に向ひ元祖大師鴨大神宮の神勅に依て浄土安心の要文を書し是を一枚起請といふ（当山第一の什宝なり毎年正月廿五日に是を出して諸人に拝せしむ）

鈴聲山真正極楽寺真如堂ハ天台宗にして開基ハ戒算上人なり本尊ハ阿弥陀仏の立像長二尺三寸慈覚大師の作なり此尊像ハ近江志賀郡苗鹿明神の神木を大師にかへて此本尊毎に光明を放怪く刻み給ふ仏形鮮にあり故に此尊像を彫刻ある承和五年に大師入唐ありて天台五台山にて顕密の奥儀を究引声の弥陀経を伝て同十四年に帰朝せり船中の引声の句を失念ありしが西方に向ひ祈誓ありしに舟の帆に小像の弥陀香煙に立て成就如是功徳荘厳と唱ふ大師感涙を止て袈裟に包み帰朝ありしを胎中に籠て大師在世の間ハ叡山常行堂に安置しける其後永観二年の春戒算上人の夢に衆生済度のため一切衆生利益せんと霊夢ありて雲母坂の地蔵堂に移し又其夜の告に神楽岡に檜の本什てる所是有縁の地なりと此霊夢に任せて是を移し白川女院の離宮之又同夜女院にも告ありしハ先帝中ハ遷し正暦三年に朝宣下ありて伽藍を建立しありつ同じく元禄五年に洛陽京極今出川より此地に還座ましくくなり（今の元真如堂の地ハ也之まなり所之に）応仁の乱に田中里の綾女に此本尊を日念仏をもさぬ経のを読ぬる時に堂に眠りれハ内陣より時るをたくゑみなれハ法かもそよし五劫思惟ハたゝ衆あぞしも

真如堂如来

真如堂
元真如堂閼伽水
方丈
玄関
稲荷
拝殿
山王

経蔵
本堂
鐘楼



神楽岡（かぐらおか）
吉田社（よしだのやしろ）
新續古今
万代を
たえぬ
兼熙
内宮

吉田宮齋場所ハ神楽岡にあり神代のむかし天照太神天の岩戸に入せ給ふ時八百万の神達集りて神楽を奏せし其所なりとぞ
當社ハ清和天皇の御宇貞觀一年中納言山蔭卿の勧請なり一説にハト部兼延の造営ともいふ 日本紀の撰者なり 楼門の額ハ日本最上神祇齋場とあり共に清水谷實秋卿の筆なり本殿大元宮にて日本神祇三千一百三十二座を鎮座したまふ日本最上日高日宮の額ハ後柏原帝の宸筆なり大元宮の額ハ後土御門院の宸筆日本国中三千餘座天神地祇八百萬神也額ハ清水谷實秋卿の筆也八神殿の額ハ後土御門院の宸筆也此社ハ大内裏の時神祇官にありて八別守護の験神なり宗なりし御内外の神宮ハ八神殿の左右にあり日本国中の神祇ハ本殿の両脇にまつる
ひそかにおもんみれバ大かた日本の神社の根を祀れり春日の社ハ西の麓にあり是も山蔭卿の勧請なり
其外摂社多しといへども委しく図にあらハせり明星水ハむかし此所星落くだりしよし龍沢ハ春日社の傍にあり日吉坂ハ龍沢より本殿に至る道なり新長谷寺の観音ハ洛陽三十三所巡りの其一なり傍に霊符神いまそかり諸経院より虚空蔵菩薩を安置なし
當所ハ一面の岡山にして嶮しからず麓ハ山瀬咲乱れそ神の森林の木の葉の錦をおりなし此ころをのぞみて遊目を慰じ奥ゆかしく世に知られぬ此辺の目の絶を惜む景なりけり

長徳山知恩寺百萬遍ハ浄土鎮西四ヶの一本寺なり古ハ加茂の神宮寺にて慈覚大師の艸創なり法然上人ハ鴨下上社尊信ありて感應をうけ給ひしにより一枚起請文を弘通したまふとなれバ鴨皇太神宮御宝前にて末世衆生のため一枚起請を書しめ給ふ是より當寺を改て念佛の道場とし境内勢観房源智上人に附属したまふ 源智上人ハ當寺の二世にして備中守師盛の男なり無双の智者といふ 後醍醐天皇の御宇に日本大に疫癘流行て死するもの数を知らず帝これを憐みたまひて諸寺に祈祷をおほせらるゝ いへども更に験なし時に當寺の八世善阿上人に勅命ありて是を祈らせ給ふ善阿参内して更に餘りもなく一七日の間念佛をとなへて一百万遍に及ぶ疫病忽ち退て天下安堵す 此時修する所の大珠数今にあり 帝大に叡感ありて號を百万遍と賜ふ 此時弘法大師の筆の利剣の名号を綸旨を賜ひ當寺の什宝とす 本堂にハ元祖大師の像を安置す本師堂の釋迦如来ハ慈覚大師の作也鎮守ハ鴨太神宮也 毎年三月當寺にて法楽の神事を執行なり 堂前に石碑あり 建久年中に小松内府重盛宋朝へ黄金を送る其志を感じて襄陽乃郡興寺より彫刻の阿弥陀經を贈る 今猶前囲に其形を模して立 一切不朽のものなり 諸寺に此石碑を蔵する

長徳山知恩寺 百萬遍

慈照寺ハ鹿ケ谷の山にあり一名銀閣寺とも称し禅宗にして夢窓国師を開祖とす原此地ハ足利八代の将軍義政公文明十二年に世務を譲りて閑居しあふ別荘なり故に東山殿と號す（延徳二年正月七日に）薨じ給ひて慈照院殿喜山公と法名し遺命に任て此所を寺とし給ふ

東求堂ハ義政公の持仏堂にして観世音を本尊とし又慈照院の像を安置し西のかた上壇にかゝる水引ハ濃紫の印金なり古渡にして世に稀なる奇物とぞ若松の画ハ相阿弥の筆啼々鳥ハ永納の画也

茶湯の間ハ四畳半にして東山殿の物数寄なり茶亭四畳半の濫觴とぞ此頃高貴の賓客常に集會ありて茶の湯を楽しむ和漢の奇物を翫ぶ事ハ是れを後世に傳りて時代物といふ

二重の高閣あり（小山鹿苑寺の金閣に準じてこれを銀閣と號す）上を仏空殿下を潮音閣といふ

鎮守八幡宮ハ護國廟といふ閣の東に橋あり分界橋迎仙橋濯錦橋臥雲橋といふ巽のかたに泉あり洗月泉と號す流下の橋を龍背橋といふ仙袖橋仙桂橋ハ東求堂の東にあり落照閣の北獅躅坂ハ此より上て夕陽を止む向月臺銀沙灘ハ白沙を舗く落月を惜む細川石。畠山石。山名石ハ官領職の献にして其英名ハ後世に朽ず浮石坐禅石ハ池中にあり淡路嶋山の傍にあり龍蟠石。蹲虎石。臥牛石。伏虎石。點頭石。布袋石。天柱峯。廻雁峯。香爐峯ハ其石の形によりて号とす北斗石。落星石。寿星石。濯纓石。謝公塢ハ故事を以て名とす其外大円石。爛柯石。釣月臺。仙人洲。白鶴嶋。臨湖臺。仙草壇あり是乃ち山水月并門ありしといふ抑此庭ハ東山殿の好みにして茶道相阿弥台命を蒙りて造しより庭中の風光眞妙にして山水の法式をそなへ四時の壮観足らざるといふ事なし末代庭造の軌範とされ洞庭西湖も掌に握り松嶋象潟も目前にうつして壺中に山川を縮め一粒の粟中に日月を蔵しうる神仙の術ありとぞ見えたる

ぎんかくじ
銀閣寺
月待山
東求堂
我庵ハ月まち山の麓にてかたふく庭のかけをしそ思ふ
慈照院義政公

毎年七月十六日の
夕暮大文字とて送り火ハ
浄土寺の後山如意が嶽に
あり昔山麓に浄土寺とて
天台の伽藍あり本尊阿弥陀仏
一とせ回禄の時此峯に飛去り
光明を放ちけれバ是を慕て
本尊を旧の地へ安置し
其より盂蘭盆会に光
明のかたちを作り火を
ともしける其後弘法
大師大文字にあらため
られ星霜累りて文字
のかたちも廃れしを東山殿
相国寺の横川和尚に
命せられ元のごとく
再興しあらため大の字
初畫の一点をさく
九十二丈あまりといへ
冬は白雪の朝も

此大文字山に雪
ふりて洛陽の
眺となりけれバ
雪の大文字
とぞいひ
侍る

北白川は銀閣寺の北なる里の名にして川も民家の中を西へ流る
是なん名所の白川の其一なり

後拾　あづまぢの人にとはゞやしら河の関にもかくや花は匂ふと　民部卿長家

詞花　白川の春の梢を見渡せば松こそ花の絶間なりけれ　俊頼

新後撰　秋の夜の月も疎きそ洗ひきれ世にかはらぬ白川の水　為教

此里は洛より近江の志賀坂本への往還なり志賀の山越とも云　素性法師
が名歌が代々の名高きをありかと伝へられし白川の瀧は道の傍にありて
日陰を晒し川の半に橋ありて左の方は右の方にありて流もいとゞ早く
なだれゆきて谷の水音淅瀝して涼しみのそれの花をうつせし如くなる流
清くもとこそ皎潔たる月の紀聞しく橋の下に牛石といふあり
形は牛の臥たる如くなり是よりつゞしに山中の里あり比叡の無動
寺へ通ひぬる道そ細道なり少し入りてあの門の一家よりは川の後見
小さりて水車めぐる

志賀の山越にて石井のもとにてものいひける人の別れける折によめる

古今　むすぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな　貫之

志賀の山越にて

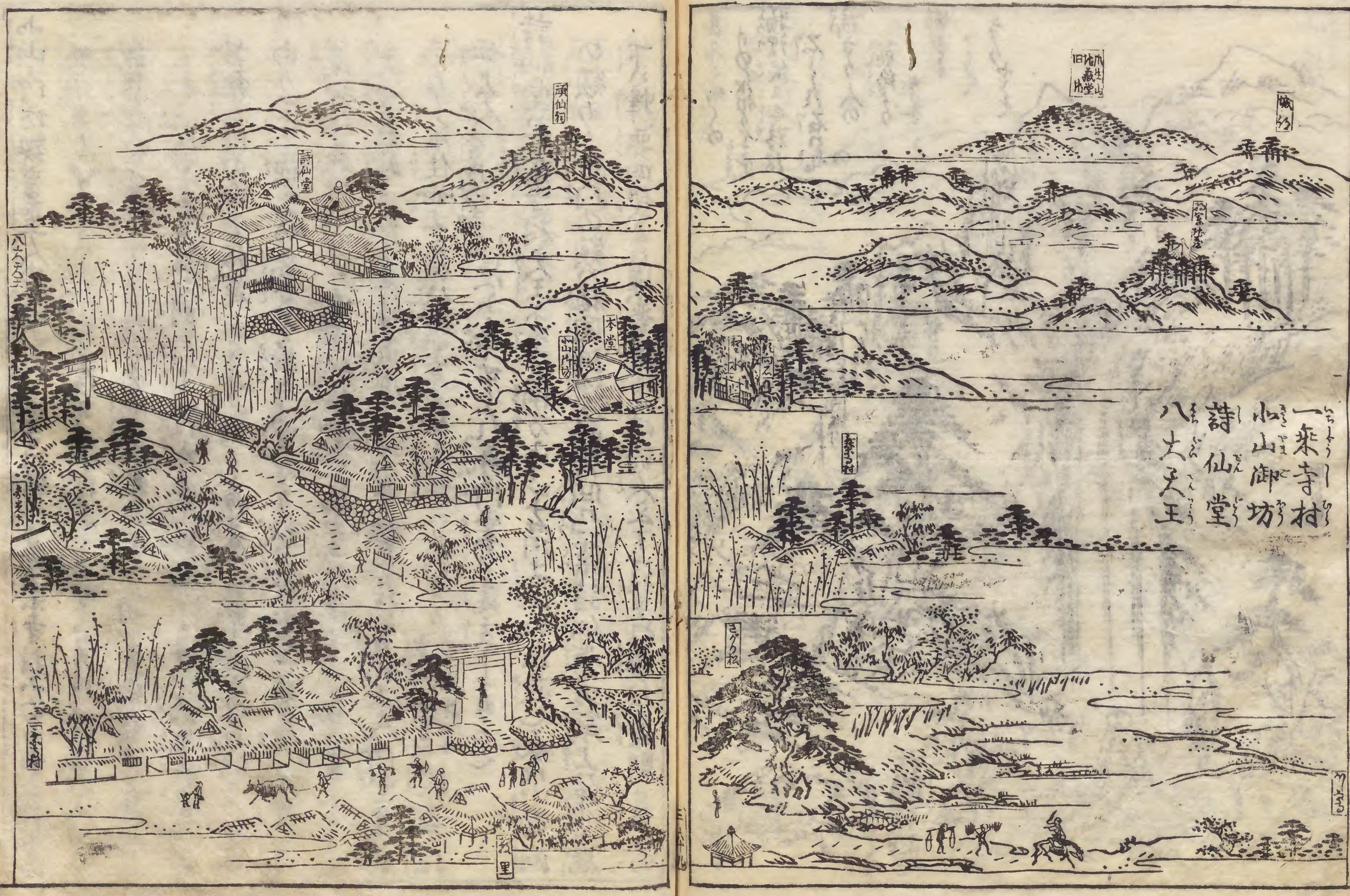
同　山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり　春道列樹

山中村は白川の里より一里半東にして山城近江の境なり長谷の
山路と詠し此峯は近く三井寺の入相の鐘は志賀の浦風に誘はれ
琵琶湖の風景一眼の中にありて地勢穆々として心も奪はるゝ如くなり
千菜山光福寺は百万遍の北にあり豊臣秀吉公に干菜を多く献じ
たりし故此号を賜る　俗に干菜寺といふ　又六斎念仏の本寺にして免許ある例年
六月廿五日近郷より集りて六斎念仏を執行しけるとなり
瓜生山将軍地蔵は白川の北にあり原は瓜生山の嶺にあり寶暦十二年
此地に遷すと本尊は石仏の地蔵尊長二尺の像にして足利将軍義輝公此地は永禄年中城郭に
細川晴元将軍山に築城のより長亭紀に
かくより其頃は此所も城中に安置せしと

小白川

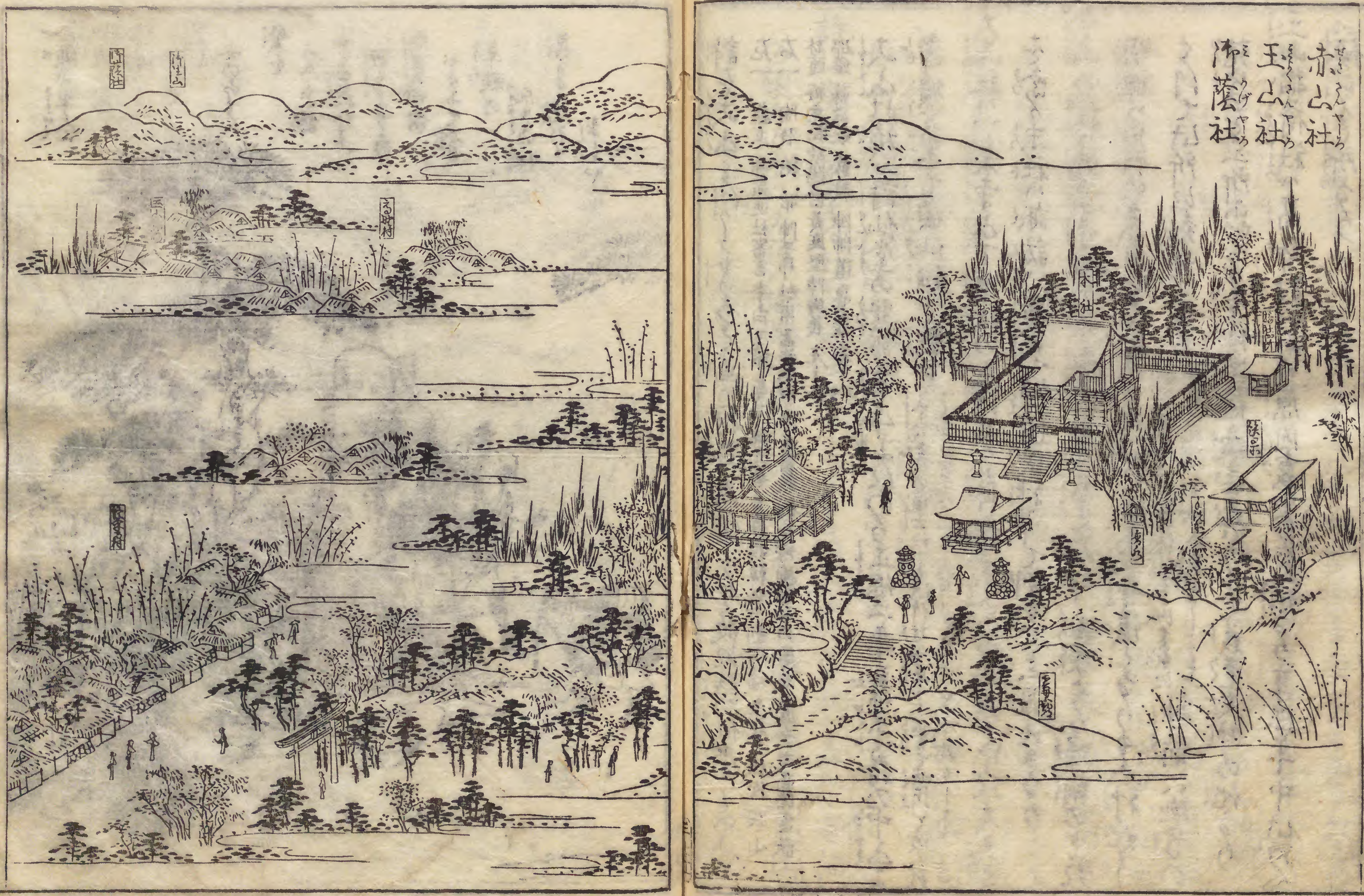
小白川の里人ハ石工を業として山に入て石を切出し燈籠手水鉢

其外さまざまのものを作りて商ふ物理編に土精ハ石となり石ハ気の核なり人の筋絡より爪を生ずるごとくなりとぞ


一乗寺村
小山御坊
詩仙堂
八大天王
詩仙堂

小山御坊親鸞聖人の舊跡は一乗寺村の郷中舞楽寺村にあり西本願寺の
懸所なりむかしは山門の末院にして法堂巌重なり爾地に霊水あり
故に聖水山舞楽寺と號す聖人叡嶽にありし時一宗開發の志頻頻に
して此所に来り百日別行し霊水にて垢離しめし洛陽六角堂救
世観音にあゆみを運び給ふ又ある夜夢中に聖徳太子此地に来り紹向
ありて往生極楽の要文を授け給ふ是より他力本願の一流を弘め末世の衆
生を化益し給ひしなり霊水親鸞名共に御堂は東にあり永正年中まで
堂舎巌然たりしが其後荒廃に及ぶ本願寺九代實如上人御堂草創
ありしが証如上人の代に堂舎を山科へうつさる 聖水山の郷近年法　今山科にあり
如上人なり當御門主門徒に命ぜられ再御堂を建立し給ふ
詩仙堂は一乗寺村大王に至る南方にして石川丈山の山荘之表に小有洞
の額あり中門の額は梅関踏次の額は凹凸窠詩仙堂の額上は嘯月樓
下は蜂要四壁上には漢晋唐宋の詩人三十六輩の像を畫則其人の

詩を丈山みづから書たまふ畫は狩野尚信これを故に詩仙堂といふ
左一　蘇武　謝霊運　杜審言　李白　王維　高適　儲光羲　韋應物　韓愈　劉禹錫　李賀　杜牧　寒山
右一　陶潜　鮑照　陳子昂　杜甫　孟浩然　岑参　王昌齢　劉長卿　柳宗元　白居易　盧仝　李商隠　霊徹
林逋　梅堯臣　欧陽修　黄庭堅　陳與義　左十八
邵雍　蘇舜欽　蘇軾　陳師道　曽幾　右十八
丈山の墳は詩仙堂の巽の方山にあり正保二年舞楽寺村の中山に
壽壙を築て頑仙祠と號す 丈山は三河の隠士にして此竹林に居し誓て鴨川を渡らず　しかり寛文十二年五月廿三日卒す年齢九十歳
大王社は一乗寺山下里松の東にあり古は舞楽寺のやしろといふ八大天王
を祭る末社は諏訪八幡宮也此地の氏神にして例祭は三月五日なり
赤山の社は修学寺村の東山下にあり慈覚大師唐土より帰朝の時に
明神は白羽の矢を負て松の上に現じ天台守護とならんとの神託あり
よりて此所に勧請しけり 韓宅の節當社の神体をみて家に張まへは鬼門金神の祟をなしとぞ
梵字を三所にかくる本地堂は地蔵菩薩にして慈覚大師の作なり
玉山稲荷社は高野村にあり原内裏にありし祠なり享保年中此地へ
遷さるる所なり



赤山社
王山社
御蔭社

八瀬の里人ハいにしへの風俗ありて男も女のごとく髪をくるくる髷女も男の如く腰にさゝけ脚半は向合のくゝりそ合せ草鞋の爪先の紐異なるハ故ありて来るや

氏神天満宮の名井れすふ弁慶の背競石としてたかさ八尺それより北に厳山西塔よりさては探題とらひ傍へ待る鬼が洞といふハ里の西の方に昔叡山の悪児鬼同丸といふ者住しところ羅山文集ニハ酒顛童子なれ仰し棲ところなり

御蔭社は叡山の西北麓高野川の東にあり下鴨皇大神宮降臨の地なり故に御生山ともいふ例祭は四月中の午の日なり内裏より順例の祭式魏々として氏人は騎馬にて列を正し社司ら錦蓋をかざし楯鉾弓箏の神具をもつてこれを列ねて下鴨の社に臨幸ある也

新勅　かけて祈るそのかみ山の山人と人もみあれのもろかつらせり　雅経

矢背の里は高野の北西山にあり天武帝大友王子と位を諍ひて山城の山へ馳せ給ひし時王子の軍兵追ひかけ奉りて射かけたれば御脊に矢中たり山の人に名づけて（又八瀬とも書）当所に竈風呂あり天武帝矢の疵を治せんためにこれを始とす（今も竈風呂七八軒ありて何れも湯治を旨とす　竈風呂の内は青松葉を焼功能とするなり）

大原は八瀬の北の里にあり若狭街道にして東西に八つの郷あり（戸寺村　上野村　大長瀬村　来迎院村　勝林院村　井出村　野村　草生村）

新古　日数ふる雪げにまさる炭竈の煙もさびし大原の里　式子内親王

新勅　大原はひらの高根の近ければ雪ふるほどを思ひこそやれ　西行

惟喬親王遺跡は上野村にあり（是御墓にして五輪石塔あり閑居の地は今所田といふ今田の字を用ゆる）

西方院　上野村にあり開基は寂忍法師

摂取院　大長瀬村にあり本尊は阿弥陀仏　聖應大師の弟子開基は浄住法師

融通寺は来迎院村の南にあり本尊は阿弥陀仏の坐像にして湛慶の作なり開基良忍上人の像あり（当寺は融通念仏の開祖也天治二年の頃洛陽より来りて弘めたまへり融通とらくは自他の念仏彼の功徳と成り他は随喜して是を修する時は其功徳久に帰すと是自他不二平等融通を不可思議広大の善功なりしとぞ）

魚山来迎院は融通寺の東に隣る本尊は三尊にして中央は薬師仏（右阿弥陀　左釈迦）開基は良忍上人也此地は叡嶺西塔の北谷にして昔は坊舎一百余宇ありしとかや　しかるに魚山と号するは漢土の天台山の西に大原魚山といふ所あり天台山の支山なれば此例によりて号けるとかや

音無瀧は来迎院の東四町ばかりにあり飛泉二丈余にして翠岩に傍ふて南へ落る蒼樹蓊欝として陰涼たり頗る幽微にして毛骨悚然たらしく近づくべし

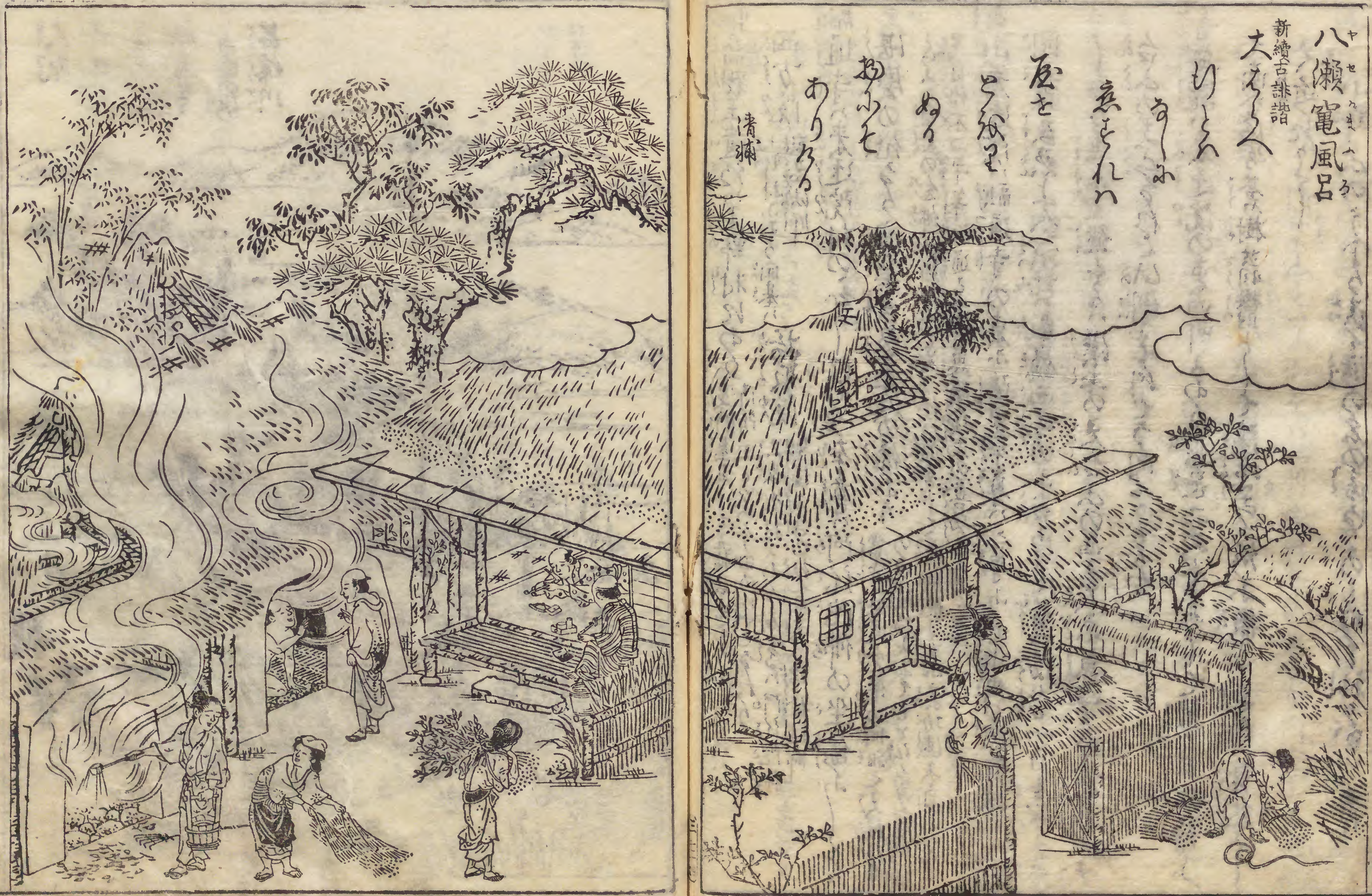
夫木　小野山のうへより落る瀧の名の音無にのみぬるゝ袖かな　西行

八瀬竈風呂

新續古誹諧

大えん
りとん
すゝみ
京をされ
屋を
とめ里
ぬり
あれぞ
ありける

清輔



大原
勝林院
来迎院
融通寺
音無の瀧
呂律川

新古今
世をそむくかたはいつくもありぬへし大原山ハ住よかりきや
和泉式部

返事
おもふ事大原山のすみかまハいとゞなげきの数をこそつめ
おね井尼

小野山ハ高野の北にて山をいふむかしハ此所にて炭を焼しこれを歌に詠を

拾遺

をの山木を朝な夕なにこりはてゝさむさをしのぐをのゝ炭焼　好忠

後拾遺

夕ざれハ叢立まよふて秋風寒し小野の篠原　藻璧門院

呂律川　来迎院の谿川なり別きて南を呂川といひ北を律川とる漢土の魚山の谿川二流あり呂律川といふ其例によるなり

鉋捨藪　呂川の北にあり大原問答の時熊谷蓮生師鉋を袖に隠して法然上人の用心に小借にて来生みいらく師のいかりをうけてこゝに捨しとなり此藪の中に捨し鉋なりとてこれより大に恥しめ給へり

井手の清水　おや子の清水　世和井水　右の外に鳴海の清水ありて律川の橋の左右にあり何れも所さだかならずむかしの跡ならんか後考あるべし

熊谷腰掛石　律川の橋南の北にあり蓮生法師此所に腰をかけて法問の勝劣を聴聞しけるとなり

梶井宮圓融院　梨本房ハ呂の川の北にあり天台の座主にして諸門跡推てあれ祖とす

極楽院　當院にあり恵心僧都の妹安養尼の庵室の旧跡なり

極楽院ハ寂阿上人ゟ此人ハ藤原の為忠入道の子なりと云う

来居

つかるゝび袖あそめられ撫花に濃の香をも捧や煮らん　寂阿

護法石　當院の門前垣の傍にありむかし皇慶阿闍梨といふ智徳の僧ありて常に随従をせし護法童子といふ皇慶の滅後に化して石となりしといひ伝ふ

當院むかしハ東坂本にあり梶井の葉たるに近代此地へうつさるゝとかや　今に旧跡の名あり

寂山房翁の墓　當院の後ろの山にあり古代翁炭を焼て盛し翁の墳なりとぞ

魚山勝林寺ハ梶井御殿の北にあり本尊ハ阿弥陀ヘ坐像なり長七尺佛工の祖康尚の作也當院ハ一條左大臣雅信公の息大納言入道寂源法師の草創なり叡山の僧都本覚超同静慮院遍救と大原の寂源此寺の縁起とあるしなし如来の有相に於て佛果の空不空の議論ありしに覚超ハ不空とのたまひしに如来相好を隠し偏救ハ空の義を立て相好なしとのたまひし時ハ中道實相ふりそめ本の本尊となりしより世の人證拠阿弥陀と称しける又文治二年の秋法然上人と山門座主顕真法印及び諸宗の学徒と一向専修の問答ありしに法然上人の法論あらしに本尊光明を放せ給ひしかバ大原問答といふなり法然上人の弘法に伏して顕真もたちまち念佛の行者となりて則法然房に依りてたち称名念佛を給ひける

實光坊　勝林院の前にあり後鳥羽院の御塔ハ坊中にあり

法華常行堂　實光坊の北にあり本堂の又にあり聖応大師の建立也恵心の作

加茂浴衣かけ石　勝林院の西にあり皇慶法師天原に居をはしめ給ひし時御衣をかけ給ひし石の上に掛しとて今も此浴衣をかけしといひ伝ふ

芹生里 大原郷にありむかし和哥に

大原や芹生の里の月ハ入川ぞろ我身もさえ〻ぞうらん　実家

古知谷光明山阿弥陀寺 大原勝林院より十八町ばかりにあり 如法念仏の霊場にして本尊阿弥陀仏ハ恵心僧都の作也 當山開基弾誓上人ハ尾張國海辺の人なり 父ハ幼くして母ニ弥陀三尊を念じて名號を唱ふる事を好めり 其後弥陀あらはれ蓮華を授けて弥釈丸と號く 仏法繁昌の暁に出誕しぬ 其後山城大谷より白幡一流にして霊瑞多しれける法國塚尾の観世音ニ百日参籠し念仏諸行に勝る要文を授かる 其より自行の為ニ山居し 或ハ法國を修廻しぬ ある時洛陽に到りて五條の橋を通りかゝり 洛北のかたに紫雲靉靆光明赫々たり 其所に至りて是ぞ有縁の霊地とて一宇を建営しぬ 當山これなり 慶長十八年五月廿五日開山上人遷化しぬ 春秋六十二才なり 生ハ有髪の僧形にして鬼神より授かりし鉄の足駄と鉄の杖あり 携へし品器ハ當寺の什宝也 上人の絵詞傳二巻 翼讃一巻あり 其ニ世ニ行はる 又自作の像ニ上人髪を植給ふ 世ニ植髪の尊像と賞ス 御杖水ハ當山に水乏しきゆへ上人錫杖をもつて岩間を穿ち給へハ流水湧出す のむ人ハ病苦を免るゝとの事なり 抑一上人の名號御筆にて霊場ありし事ニ載る 其の後安永の頃 澄禅和尚 享保の初ニ當山に居り 開山の再来と称し 霊験著ニ帰依の輩特ニ利益倍々あり 三昧発得の大徳なり 行状記七巻ありて世ニ行ハる

寂光院ハ草生村にあり原弘法大師の開基にして文治の比建礼門院閑居しめひしところ今に至り尼あまとゞまる本尊地蔵菩薩ハ聖徳太子の御作なり則門院の御影阿波内侍の像あり庭にハみぎハの池みぎハの桜を

平家物語　後白川法皇大原御幸の時

池水にみぎハの桜ちりしきて浪の花こそさかりなりけれ　後白川院

此辺の垣ほ緑蘿垣といふ門院の御墳ハ後の山にあり往昔翠黛山といふ不動千手石石剣の路あり弘法鎮守神明宮　うしろの山にあり天の岩戸といふ岩窟あり宛合の御ハ寂光院の前にあり

○建礼門院と申ハ平相国清盛公の御むすめにして十五歳にて女御の宣旨を蒙り十七にてのくらゐにそなハり廿二の御時皇子御誕生あり是を安徳天皇と申奉る平家の一門西海に入水の時やうやう源氏の武士にとらハれ給ひ帰京ありて吉田の辺に住せ給ひ廿九の御時かしらおろし給ふ文治元年長月の末に寂光院へ入らせ給ふとかや

平家物語

思ひきや深山の奥にすみかして雲井の月をよそに見んとは　建礼門院

此地ハまことに寂寞として人跡まれに洛のうてもとをく春ハ軒端の梅かほり庭の若草あをミ青柳の糸風にミだれ山桜松にさきそへて花橘白くかをり秋ハいとゞ物淋しく虫の音哀れなりけり

此御詠より此草生村ハ今もくつりん也とも

朧清水ハ寂光院のかたはらにありむかしより名高き名所にして和歌あり
詠じける歌数多し按るに〇は源をかくして月の影は清水にやどりて澄る故に
又月の朧なる歌によりて清く退蓮法師も此地に幽棲して月も浮まん
大原やしばし寂然法師ハ月をぞやどれ大原の里とながめしも
今さらに氷の面より出るかぎりにすみ侍るなり

新拾
水むすぶ朧の清水底澄て猶こゝに月の影はうつるや　素意法師

続古
後鳥羽院がくれのひとに大原にておはしましける時
入月の朧の清水いかにしてはての澄むべき影をとゞめん　順徳院

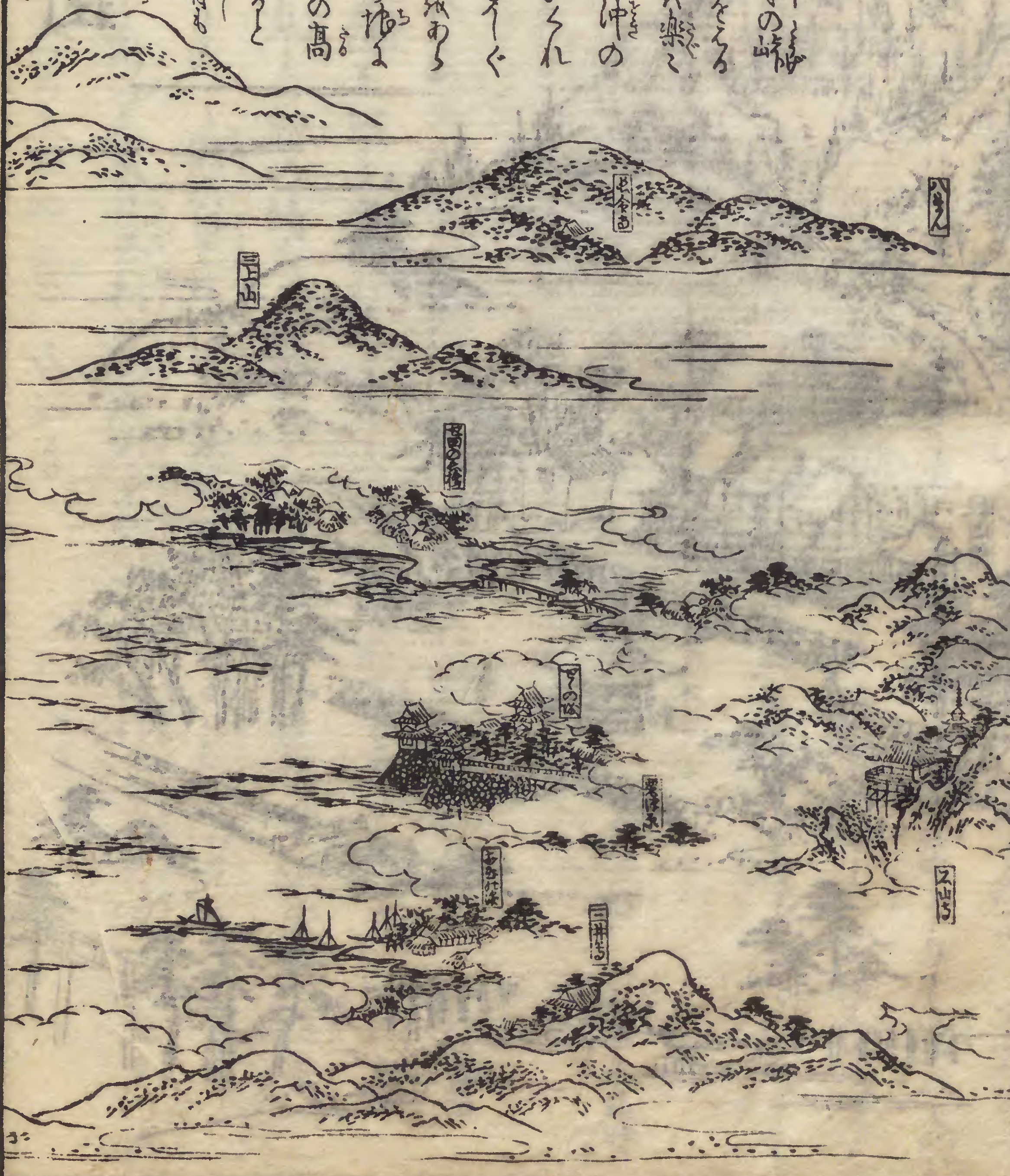
続後
八重葎しげれる下にむすぶらん朧の清水夜もすがらなど　匡房

新千載
つくの哀る朧の清水岩越てたれや汲しものうき代　俊頼

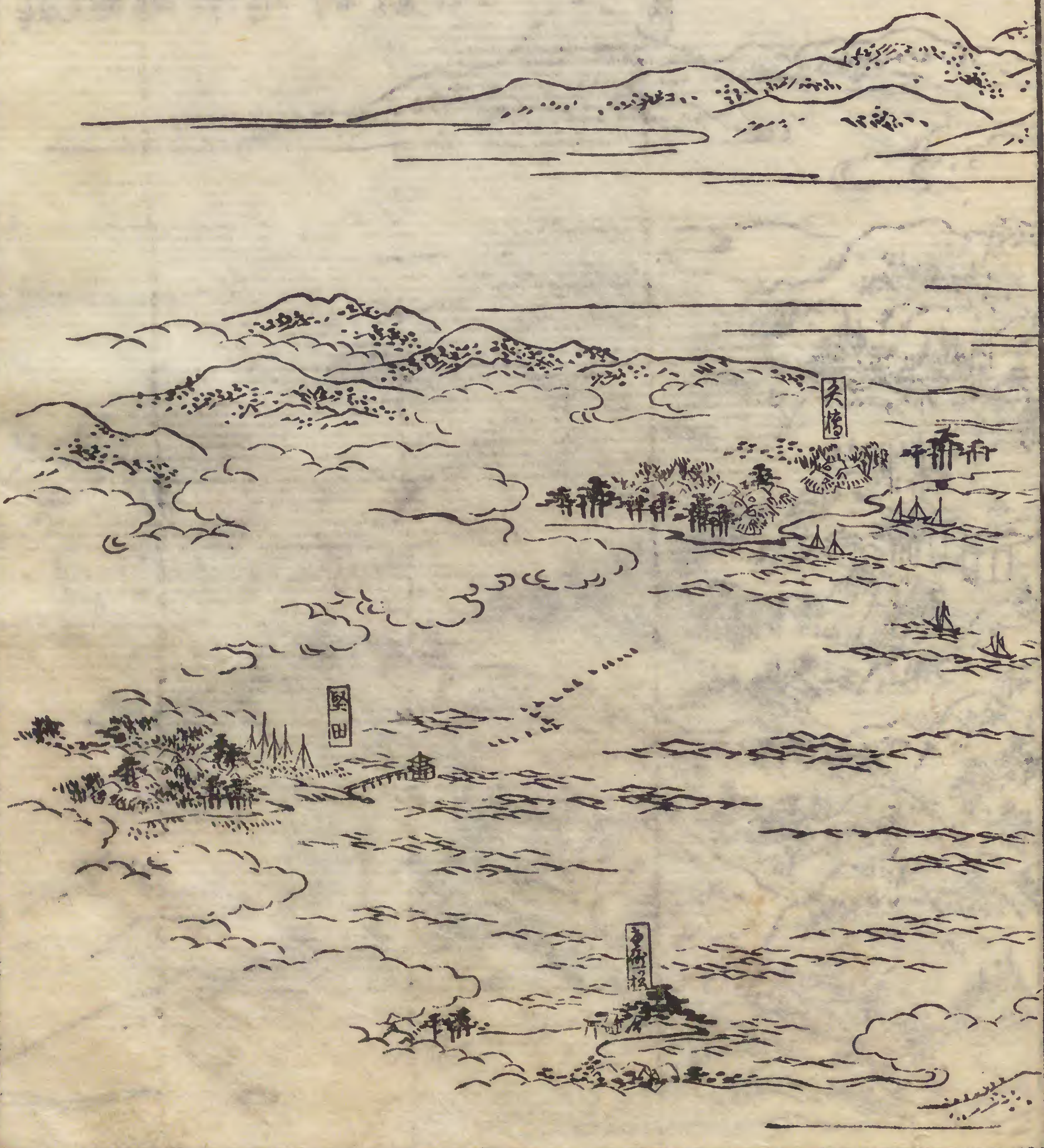
まれにきて朧の里に住なれて光も清水の影はうつりけり　丹後

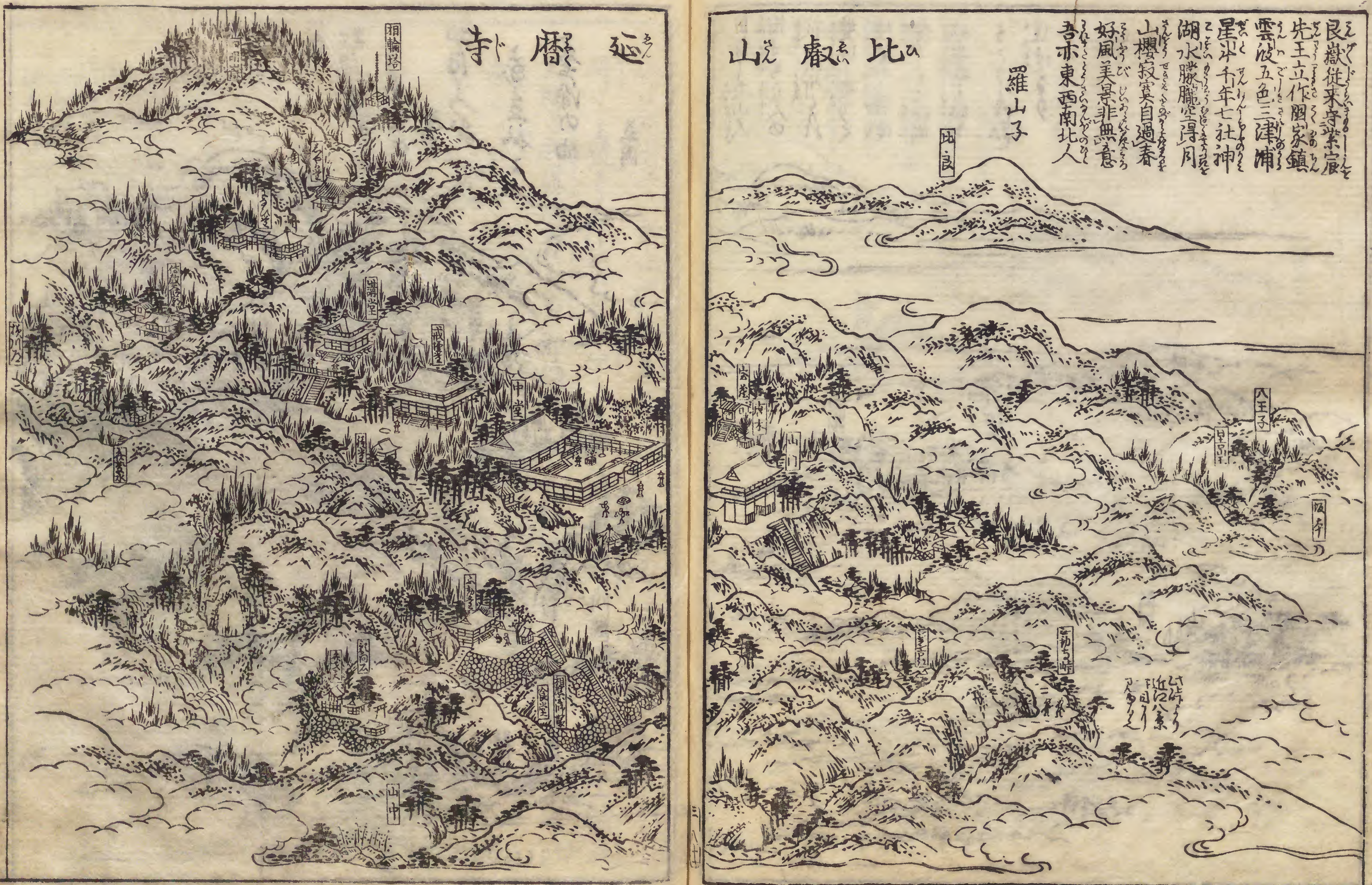
江文のやしろハ大原井出村にあり大原郷中の氏神にて宇賀魂神なり
祭礼ハ三月三日神輿二基あり

叡嶽不動寺の峠
より琵琶湖を見る
にこんおろせば楽く
波や丹穂てり沖の
舟は釣竿にかくれ
かゝ濱の松は冬しぐ
れ翠は急流ある
り湊の真砂地よ
駒とあそ比良の高
根の花をみると
詠し頼政の昔も
おもひ出られ侍る
王維が山水は
画賦に遠人を



目前し太山大
樹す馬豆人の
挑も此所なれ
雙峰に濟りて
淡海の八勝連
綿として近衛
政家卿も魂と
うごかしゐひ
佳境なり




比叡山
延暦寺
良嶽従来守紫宸
先王立作國家鎮
雲波五色三津浦
星斗千年七社神
湖水朦朧空得月
山櫻寂寞自過春
好風美景非無意
吾亦東西南北人
羅山子
相輪塔
中堂
八王子
山中

千載
おほけなくうき世の民におほふかなわが立杣に墨染の袖
慈円

比叡山延暦寺一乗止観院は本朝五岳の其一つにして王城鬼門に当れば艮峰とも號す。そのはじめは日枝山と書し、桓武天皇御宇延暦年中に傳教大師と叡慮と等しく帝都鎮護として根本中堂を建営しあそばしより比叡山と改むる。又別名ありて天台山、我立杣、艮岳、鷲峯、台嶺、叡嶽、大日枝、小日枝等の号あり

新古　比叡山中堂建立のとき
阿耨多羅三藐三菩提の仏達我立杣に冥加あらせたまへ　傳教大師

拾遺　愛宕山の一の鳥居より日枝山を見れば駿河の冨士を見るに似たりとて都のふじといふ
我庵のあたりは三ゆる雪すれば都のふじといはれける哉と　読人しらず

東塔

止観院と號す。西塔横川を合せて三塔といふ
東塔の東谷に十一坊西谷に十一坊南谷に五十二坊北谷に十二坊あり

根本中堂　本尊は薬師仏傳教大師の作なり　一乗戒壇堂　釈迦文殊弥勒を安置す　仁十四年に造立ありて慈覚大師入唐のとき漢土の五臺山の土を荷擔してこの戒壇の下に埋む　文殊楼　五臺山の文殊に向して本尊とす　文殊菩薩を安置す　大講堂　大日如来　梵天帝釈文殊を安置す　嵯峨天皇の御願　前唐院　慈覚大師の廟堂なり　太宗勅行の堂なり　勅使参向の堂なり　千手堂　千手観音を安置す　山王院　智證大師の本房にして　千手井　又糸蒙ありもつて西塔武蔵坊千手堂より千日参詣をはじめ毎日閼伽とせしとぞ　山王社あるに平相国清盛熱病の時此水を取て其の病を治す　浄土院　傳教大師の廟堂也　寂光と號す　俗姓は三津氏江州志賀郡の人也

西塔　寶幢院と號す西塔の東谷ニ九坊南谷ニ十坊北谷ニ十二坊また浄土院をかねて谷川を號とす

法華堂　本尊ハ普賢菩薩なり　轉法輪堂　本尊ハ釋迦文殊四天王永和元年勅ニよりて延秀圓澄造立ス　常行堂　阿弥陀佛を安置ス寛平五年辭親僧正建立なり　椿堂　如意輪観音を安置ス山門建立の時聖徳太子此山に登て勝地を求て此本尊を安置ス又杖乃の杖を伽藍に植立られしが後に枝葉茂りて大木となる年経て荒癈に及び今小堂あり　寶幢院　恵亮和尚の廟塔なり　相輪樘　王城の東北にあたる本地傳教大師の銘あり俗に鬼門柱といふ高さ四丈五尺九層あり十一の寶鐸を懸る弘仁十一年歳次庚子九月十五日　普龍寺　黒谷にあり本尊ハ文殊十一面観音浄名居士像安置ス法然上人此所に住せ本像あり俗に之を黒谷といふ

横川　楞厳院と號す十四坊あり

中堂　本尊ハ聖観音慈覺大師の作脇士ハ毘沙門不動なり　慈恵大師廟　諱良源といふ永観三年正月三日入寂ス此ゆゑに元三大師といふ俗姓ハ木津氏ニして江州淺井郡の人なり大師の影像飯室にあり　四季講堂　五部大乗を四季に講ず　横川中堂ニ就て安置ス都鄙の諸人日々に多くありて靈験新なり　觀音堂　華表圓融ニ不二門　護あり故に名とす　大師堂　村上天皇の御願ニして慈恵大師の開基之弥勒如意輪不動山王を安置ス　といふ額諸未向者皆不二門の額ハ　慈忍和尚廟　横川小聖と号ス九條殿師輔卿の十男なり　慈覚大師の弟之首楞厳院ニ揭ぐ　横川の別所之寶備寺　安樂院　恵心院　恵心僧都住の所之本尊阿弥陀佛　飯室といふ不動堂あり　恵心の作又恵心の像ハ安置ス院内ニ菩提樹あり是れハ恵心僧都の制作しめ往生要集を宋国へ渡されし明の紹禅師披見して随喜し報酬のため此菩提樹一株を送られ

樋の人ハ日に枝葉繁茂しけるが亀の兵火に焼しける所十有九年を経て此樹忽ち枝芽出て再生ス山門是より再興ニなりし故に後鑑の樹と謂ふ座し○當院小僧都の乞を依て法華経一部精誦ありし時釋迦普賢の尊像忽然として虚空に顯はる感應をとくふ

無動寺　或ハ無幢寺に作る此所ニ坊今十三坊ニ

不動堂　相應和尚の作なり染殿の皇后ニ靈鬼の障碍ありし時相應和尚此不動尊に祈て七日が経をして靈鬼退散す故に染殿后より此所を御建立ありし

大乗院　慈鎮和尚住せられし所なり此院の上ニ墳墓あり又本覚の祖親鸞聖人も共に住せし天台の学文ありしなり當院ハ山中第一の絶景なり

山王七社の中客人宮ハ此谷の守護神なり

後拾遺

鷲の山有明の月ハめぐりきて我立杣の麓をぞてらす　慈鎮

辨財天　竹生嶋より此地ニ白蛇と化して来臨ありし宮のうしろに紀白石ニ親鸞聖人弘法の為此宮に祈誓ありしとぞ

雲母坂不動堂　本尊ハ不動明王ハ傳教大師の作なり雲母寺の額ハ石川丈山の筆とぞ　南光坊　戒壇堂の傍ニあり慈眼大師と号ス日光御門主の御本坊

當山名勝

四明嶽　叡岳第一の峯之雲母坂より登りて頂に小祠あり之に不動を安ス是山城近江八境より絶頂なり快晴の日ハ西海の浪路四国の峯々まで見ゆるなり

満土混論辻　大講堂より東へ下りて四辻あり是れより行ハ傳教大師在世の附大黒天生現の作なり又大黒堂あり是より南へ行ハ南谷無動寺通路之東へ下りて東谷より坂本へ下る宝池坊證真の旧跡花王院あり此ハ根本中堂の東なり

登天石　東塔北南谷遺教坊の門前にあり此ハ法性坊尊意僧正の旧跡

あり菅神此石に踞し 常光坊 此あたりの前ハ絶景にして中秋の月佳境也
登天したまふといふ 此山中ハ楓多くありて紅葉の時も眺望あり 三ツ子坂
戒壇院の後ろに 青龍石 西塔千手院の大嶽ハ大蛇ありて龍の口をひらきて人を取て喰ひ
なへけるゆへ 此おろしに至るまで人多く死をとる 千手院の静観僧正此石の頭に座して
一七日加持し給へハ忽然として黒雲を起し山谷震動し 三尊石 横川より西塔への道の二ツ
岩石をくだけ散しさまよへ宗忍寺 宗治拾遺に見えたり 阿字休息峰 路の傍に切石
あり此所 五百羅漢石 道より西の谷の向ふに岩石あり五百の賢聖習定の所なり
魔境をしめす 釈迦多宝佛 さまて山城近江の境也 西ハ八瀬の里へ 波母山
あり北嶺回峯の行者 王城加持修行の所也 寒風嶽 峯をいふ 華表岡より西乃高
又小比叡ともいふ横川へ行左の方山の峰に大嶽あり 東ハ横川へいくる
神代より白髭明神釣を垂し所なりといふ 華表岡
華表岡 横川の分れ道なり 又不二門ともいふ是より 阿弥陀峯 恵心僧都弥陀来迎を拝せし所也 香井の下は立て西を臨む二峯あり昔
又峯號弥陀 蟻塚 路の向ふに石垣を築小絵にある祠應和尚 道を通りし時
ともいふなり 又雨頻に降て前後崩隣を防て山儀打萬葉ありし暗時に路
を開て往来を通しむ 和尚奇異の思ひを 竜池 又赤池ともいふ 慈覚大師結界して
ふしてこの所に其下を築て儀塚と号す 龍神を潜居せしむ今も雨をいのる
附いちに 護法石 中堂の東の 如法水 中堂の 独鈷水 又寂静水ともいふ 慈恵
祈るとぞ 下にあり 閼伽井也 大師堅固の水にて慈恵院
のうら 衣掛石 和労堂より八王子に五男三女降石あり 同所に 樺生谷 横川より八王子
にあり いくらの小径にあり の道にあり
戒心谷 飯室へ下る道のかたはらにあり 俗に定家卿の墓といふ 五輪の石小塔あり
とも云ふ 定家卿墓 登蓮法師閑寂なるを愛しの石小塔あり
家集に
踏たにも見えずしてなりそよ此山の土となる身ハたのもしき哉 定家

奈良坂 横川より坂本へ下る道をいふ 一蛇池 是より西坂を登て左の谷の向ふに窪たる
大日明神の社あり 所あり今ハ水涸て池なし
水飲 雲母坂の中途にあり むかし地蔵堂ありて脱俗院と号す 雲母谷 に在むかし
雲母堂の阿弥陀仏ハ薬師堂より初て遷佛ありし所也
所ありて此比叡山雲母坂といふ
今ハ山崩て坂なし

古今
ひえの山なる音羽の滝を見てよめる
落たぎつ滝の水上年つもり老にけらしな黒き筋なし 忠岑

拾遺 権中納言敦忠西坂本の山庄の滝の岩にかきつけける
音羽川せきいれて落す滝津瀬に人の心の見えもするかな 伊勢

古今 ひえにのぼりてかへりまうできてよめる
山風にさくら吹まき乱れなむ花のまぎれに立とまるへく 貫之

玉葉よ
世をいのる心は立る松の影晴て仏よりすむ秋の夜の月 前大僧正源恵
ひえの山に二月の会とて花みし給ふこのをりねそうそのえ花つくし
せんとて人の山まなびのかし侍られは此山をえ出るを
ときいろいろ思い出て

拾遺
此川とをく鷲の高嶺に澄月の光や尽しに志賀のから崎 法橋性憲

新勅
大嶽れをく吹風に雲晴てかくれの山に月もくもりね 慈圓

風雅
三の峰二の尾根ならべ生て我立松は名にそ立るかれ 慈順

日吉山王社ハ比叡山の守護神なり東坂本にあり本社七座攝社十四座
凡廿一社なり例祭四月中申日

大宮 大己貴命 本地釋迦　二宮 國常立尊 薬師　聖真子 正哉吾勝尊 阿弥陀　八王子 國狭槌尊 千手観音

客人 伊弉冊尊 本地十一面観音　十禅師 瓊々杵尊 地蔵　三宮 惶根尊又豊斟渟尊 普賢　以上七社

下八王子宮 天御中主尊 虚空蔵　王子宮 猿田彦尊 文殊　早尾 素戔烏尊 不動　大行事 高皇産霊尊 毘沙門

聖女 下照姫 如意輪　新行事 瀛津姫 吉祥天女　牛尊 下小霊 八王子の御子 大威徳　小禅師 彦火火出見尊 龍樹

悪王子 愛染　岩瀧 踏韛姫命 弁財天　氣比 仲哀天皇 聖観音　劔宮 素戔烏尊 不動

大竈 瀛津彦命 大日　竈殿 奥津嶋姫 金剛界大日　以上十四社

若宮 國常立尊 比叡辻にあり　護國 二条院勅附之 女別當社 唐崎の神社 大宮出現の地也

續後撰　聖真子宮によみてまつりける

やはらくる光ハへたてなかりけり西の雲井も秋乃よの月　前大僧正良仙

同　日吉社にたてまつりける歌の中に大宮を

いにしへの鷲の林に散花の匂ひをよする志賀の山風　後京極摂政

久かたの天津日吉の神まつり月のかつらも光そへけり　尊圓

国立公文書館
National Archives of Japan